

昭和44年度 国立国語研究所年報

雑誌名	国立国語研究所年報
巻	21
発行年	1970-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1328/00001181/

昭和 44 年 度

国立国語研究所年報

— 21 —

国立国語研究所

1970

刊行のことば

本書は、昭和44年度における研究および事業の経過について述べたものである。

44年度に刊行したものは次の通りである。

日本言語地図(4) (報告30—4)

社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) (報告35)

電子計算機による新聞の語彙調査 (報告37)

国語年鑑 (昭和44年版)

昭和45年 7 月

国立国語研究所長

岩 淵 悦 太 郎

目 次

刊行のことば

昭和44年度の調査研究のあらまし	1
現代語の文法の研究—文体と文法との関係—	6
全国方言文法の対比研究	14
X線像による調音運動の研究	16
語の意味・用法の記述的研究—動詞・形容詞等—	17
日本言語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査—	20
高校生の漢字力に関する研究	22
就学前児童の言語能力に関する全国調査	38
言語の表現機能と伝達効果の研究	51
明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—	54
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	64
社会構造と言語の関係についての基礎的研究	69
現代語の表記法に関する研究—送りがな・漢字—	75
電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—	80
国語および国語問題に関する情報の収集・整理	84
図書の収集と整理	92
庶務報告	93

昭和44年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次の通りである。

- | | |
|----------------------------|----------|
| (1) 現代語の文法の研究—文体と文法との関係— | 話しことば研究室 |
| (2) 全国方言文法の対比研究 | 話しことば研究室 |
| (3) X線像による調音運動の研究 | 話しことば研究室 |
| (4) 語の意味・用法の記述的研究 | |
| —動詞・形容詞等— | 書きことば研究室 |
| (5) 日本言語地図作成のための研究 | |
| —作図ならびに検証調査— | 地方言語研究室 |
| (6) 高校生の漢字力に関する研究 | 国語教育研究室 |
| (7) 就学前児童の言語能力に関する全国調査 | 国語教育研究室 |
| (8) 言語の表現機能と伝達効果の研究 | 言語効果研究室 |
| (9) 明治時代語の研究 | |
| —明治初期における漢語の研究— | 近代語研究室 |
| (10) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 | 第一資料研究室 |
| (11) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究 | 第二資料研究室 |
| (12) 現代語の表記法に関する研究 | |
| —送りがな・漢字— | 第三資料研究室 |
| (13) 電子計算機による語彙調査 | |
| —新聞を資料とする— | 言語計量調査室 |
| (14) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理 | |

- (1) 現代語の文法の研究—文体と文法との関係— ……現代日本語の文法現象が文体の形成にどうかかわりあうかという観点から、比喩表現をとりあげた。そしてその成立条件や、言語形式と対比構造の関係などについて考察をするために、文学作品から比喩表現例を採集してカード化する一方、比

喩に関する研究文献の調査を行なった。

- (2) 全国方言文法の対比研究……前年度まで3年間にわたって実施した調査の結果の整理をすすめるとともに、補充のための小規模な調査を行なった。また、研究資料の保全のために、沖縄の研究者の協力をえつつ、方言の録音とテキスト化とを、沖縄の各地の方言について行なった。
- (3) X線像による調音運動の研究……前年度にひきつづき、日本語の種々の音声の発音に際しての音声器官の運動を、X線映画フィルムによって分析した。また、そのフィルムを、「日本語の発音」という題をつけ、分析に便利のような形に編集した。
- (4) 語の意味・用法の記述的研究—動詞・形容詞等— ……動詞全体、形容詞・形容動詞全体にわたる関係的・体系的な記述を目標として、語の意味を区別する特徴について分析・記述する仕事を、文学作品・各種の雑誌・科学説明文・論説文などの用例カードを資料として、行なった。
- (5) 日本言語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査— ……『日本言語地図』第4集（生活・農業に関する名詞などの言語地図50面と、調査地点の産業図1面）の編修のための作業を行なった。なお、資料の意味づけのための検証調査を兵庫県揖保郡新宮町から岡山県勝田郡勝央町にかけての地域、岡山県笠岡市から香川県善通寺市にかけての地域、の両地域で実施した。
- (6) 高校生の漢字力に関する研究……中学生の漢字習得に関する研究のために、これまで実施してきた諸調査の結果をまとめ、報告書『中学生の漢字習得に関する研究』を執筆した。また、中学校卒業段階で問題を持ち越した漢字についての読み書き能力などをみるために、卒業直前の高校生について実施した調査の整理を進めた。

なお、当用漢字の使用力という観点を中心に、高校生がいろいろの漢字をどこまで使いこなせるかを、くわしく調査するための習熟度調査に着手した。

- (7) 就学前児童の言語能力に関する全国調査……3年計画の最終年次調査と

して、「就学前児童の語彙，コミュニケーション能力調査」を行なった。
対象として，東京，東北，近畿の各地方の幼稚園から，延べ36園，1188名
（3・4・5歳児クラス）を抽出し，基本的な動詞の理解水準ならびにコミュニケーション能力の特質を明らかにした。一方，被調査園，家庭を対象
にアンケート調査を実施し，就学前児童の言語指導，言語生活に関する実
態を調査した。

- (8) 言語の表現機能と伝達効果の研究……「言語表現における場面の効果の
研究」と「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」とに分かれ
る。前者では，ことは，述語の形式，およびそれを形づくる動詞の形態
の分析に中心をおいた。後者では，二つの幼稚園の三歳児の「ことばカード」
および「カード集」を作成し，今までに作成した「ことばカード」に
これをくわえて，幼児のことばを構文的・形態的に分析した。
- (9) 明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—……明治初期の各種
文献に現われた漢語の実態を調査し，現在の漢語と比較対照するために，
①漢語研究に関する著書・論文目録の作成，②翻訳小説「欧州奇事花柳春
話」および「通俗花柳春話」の用例採集と，問題点の発見，③近代語資料
の調査などを行なった。
- (10) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究……前年度までに作成を
完了した「自動単位切り」「漢字のよみがなづけ」「活用形の代表形（終
止形）変換」の各プログラムを，一連のシステムに組みこむとともに，文
の中の各単語の，語種・品詞等を自動的に認定するプログラム（付加情報
つけプログラム）の作成にあたった。また，これらのシステム設計の基本
資料を得るために，漢字かなまじり文のエントロピー（文字・記号の連続
確率）の調査を進めた。
- (11) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究……前年度に引き続き，福
島県保原地区および茂庭地区を中心に調査を行なった。言語使用の意識に
ついて，約220名を対象に面接調査を行ない，また，録音資料について分
析した。社会構造と方言語彙との関係を見るために，親族語彙，特に同族

団をさし示す俚言を中心に調査し、その中間報告書『社会構造と言語の関係について基礎的研究(2)―マキ・マケと親族呼称』を刊行した。さらに同様な観点から、性向語彙に関する調査を行なった。

- (12) 現代語の表記法に関する研究―送りがな・漢字― ……「文字使用の実態調査」と「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」とに分かれる。前者は、42年度に実施した送りがなの意識調査の集計・分析・記述を行ない、報告書としてまとめた。後者は、1紙1年分層別漢字表および1紙朝刊前半分長単位用語例表を作成し、新聞使用漢字についてのいくつかの試験的な分析を行なった。

- (13) 電子計算機による語彙調査―新聞を資料とする― ……前年度に引き続き新聞語彙調査の作業を実施し、全体の三分の一に当たる1紙1年分の短単位処理を完了し、このデータについての報告書『電子計算機による新聞の語彙調査』を刊行した。また、原文データのさん孔をすすめ、長単位処理プログラムの一部を変更し、類別語彙表のプログラムを作成し、一部のアウトプットを行なった。

- (14) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理……例年のとおり新聞・雑誌・単行本について調査し、『国語年鑑』の資料として整理した。

なお、上記の研究のほかに、以下の研究題目について文部省科学研究費補助金の交付を受けた。

一般研究 B 現代語の形成過程に関する基礎的研究（代表 岩淵悦太郎）

〃 C 語の情緒的意味の Semantic Differential による研究（代表 西尾寅弥）

〃 D 作品用語の類似度の研究（宮島達夫）

試験研究(2) 言語情報処理における漢字処理の実験的研究（代表 林 四郎）

本年度の研究組織は次の通りである。（昭和44年4月1日現在）

◇第1研究部 部長 野元 菊雄（外国出張中）

部長事務代理 斎賀 秀夫

話しことば研究室 上村 幸雄（室長） 中村 明 高田 正治

書きことば研究室 西尾 寅弥（室長） 宮島 達夫

地方言語研究室 徳川 宗賢（室長） 本堂 寛 佐藤 亮一

高田 誠

◇第2研究部 部長 興水 実

国語教育研究室 芦沢 節（室長） 村石 昭三 根本今朝男

天野 清

言語効果研究室 高橋 太郎（室長） 大久保 愛

◇第3研究部 部長 斎賀 秀夫

近代語研究室 飛田 良文（室長） 松井 利彦

◇第4研究部 部長 林 四郎

第1資料研究室 田中 章夫（室長） 南 不二男（外国出張中）

江川 清 中野 洋

第2資料研究室 飯豊 毅一（室長） 渡辺 友左

第3資料研究室 林 四郎（室長） 土屋 信一 野村 雅昭

言語計量調査室 石綿 敏雄（室長） 斎藤 秀紀 木村 繁

現代語の文法の研究

——文体と文法との関係——

A 目 的

現代日本語の文法現象が、とくに文体の形成にどうかかわりあうか、という観点から、まず比喩表現をとりあげ、次の項目ごとに分析・考察し、分類・記述する。

1. 比喩をあらわすことのできる言語形式には、どんなものがあるか。
2. 比喩をあらわしうる言語形式が比喩を実現するための条件としては、なにが考えられるか（比喩表現であると判定するさいには、どんな種類のむずかしさがともなうか）。
3. 比喩が実現しているばあいの言語形式のそれぞれにおいて、どのような対比の関係がどう表現されているか。

以上をもとにして、比喩とはなにかを考え、さらに、言語面の諸条件からそれはどう類別できるか、という問題をさぐる手がかりをつかみたい。

B 担 当 者

話しことば研究室の中村明が担当し、衛藤蓉子が、用例を採集しカード化する作業の一部にあたった。

C 本年度の作業

- (1) 中央公論社版『日本の文学』所収の口語体（部分的に文語体のでるものをふくむ）・散文（部分的に韻文のでるものをふくむ）で書かれた小説（戯曲仕立ての部分のでるものはのぞく）のうち、各小説家（小説作品があっても小説家と考えられていない作者のばあいはのぞく）の代表的な作品（「抄」はのぞき、「編」はふくむ）を各1編、次の規準で選定した。
 - 1) 『新潮日本文学小辞典』（新潮社1968）と『現代日本文学大事典』

(明治書院1967)の両方に作品解説のあるものを選ぶ。

- 2) 1)にあたるものがなければ、その一方に作品解説のあるものを選ぶ。
- 3) 2)にあたるものがなければ、その両方で作家解説中に作品名のでもものを選ぶ。
- 4) 優先の同一順位の作品が2編以上あるばあい、および、該当作品のな
いばあいは、1)の両書の作家解説のほか、次の諸書を参考にして選ぶ。

『現代日本文学辞典』(河出書房1949)『近代日本文学辞典』(東京
堂1954)『世界文学辞典』(研究社1954)『縮約日本文学大辞典』(新
潮社1955)『岩波小辞典日本文学<近代>』(岩波書店1958)『日本文
学鑑賞辞典<近代編>』(東京堂1960)『新世紀大辞典』(学習研究社
1968)『文芸年鑑』(新潮社1968)

- 5) 資料不足できめがたいばあいは、長編を優先させる。

(選ばれた作品)

二葉亭四迷	『浮雲』	幸田 露伴	『連環記』
森 鷗外	『雁』	泉 鏡花	●『高野聖』
国木田独步	『牛肉と馬鈴薯』	島崎 藤村	『夜明け前』
田山 花袋	『蒲団』	岩野 泡鳴	『耽溺』
近松 秋江	『黒髪』	徳田 秋声	□『縮図』
正宗 白鳥	●『何処へ』	夏目 漱石	●『明暗』
長塚 節	『土』	鈴木三重吉	『千鳥』
中 勘助	『銀の匙』	永井 荷風	●『温泉綺譚』
武者小路実篤	●『お目出たき人』	志賀 直哉	『暗夜行路』
谷崎潤一郎	『細雪』	有島 武郎	『或る女』
長与 善郎	『陸奥直次郎』	久保田万太郎	■『春泥』
里見 弴	■『美事な醜聞』	芥川龍之介	『歯車』
山本 有三	『波』	佐藤 春夫	○『田園の憂鬱』
広津 和郎	●『神経病時代』	菊池 寛	『恩讐の彼方に』
宇野 浩二	■『蔵の中』	葛西 善蔵	『湖畔手記』

嘉村 磯多	『業苦』	内田 百閒	□『実説艸平記』
牧野 信一	『ゼーロン』	稲垣 足穂	『弥勒』
室生 犀星	○『杏っ子』	滝井 孝作	㊦『無限抱擁』
梶井基次郎	㊦『檸檬』	中島 敦	『李陵』
横光 利一	□『機械』	川端 康成	『雪国』
葉山 嘉樹	『海に生きる人々』	佐多 稲子	㊦『くれない』
壺井 栄	『二十四の瞳』	円地 文子	㊦『女坂』
幸田 文	㊦『流れる』	尾崎 士郎	『人生劇場＜青春篇＞』
火野 葦平	『麦と兵隊』	尾崎 一雄	㊦『まぼろしの記』
外村 繁	『滯標』	上林 暁	『薔薇盗人』
井伏 鱒二	㊦『山椒魚』	舟橋 聖一	『木石』
丹羽 文雄	○『顔』	石川 達三	『蒼氓』
高見 順	『如何なる星の下に』	石坂洋次郎	『若い人』
小林多喜二	『蟹工船』	徳永 直	『太陽のない街』
林 房雄	『青年』	武田麟太郎	㊦『日本三文オペラ』
島木 健作	『癩』	中野 重治	㊦『歌のわかれ』
堀 辰雄	㊦『風立ちぬ』	野上弥生子	『秀吉と利休』
網野 菊	㊦『ひとり暮らし』	宮本百合子	『伸子』
宇野 千代	㊦『おはん』	岡本かの子	○『母子叙情』
林 芙美子	『放浪記』	平林たい子	○『施療室にて』
大原 富枝	『婉という女』	伊藤 整	『汜濫』
石川 淳	『普賢』	中山 義秀	㊦『碑』
永井 龍男	○『風ふたたび』	阿部 知二	㊦『冬の宿』
坂口 安吾	㊦『白痴』	織田作之助	『夫婦善哉』
壇 一雄	㊦『花筐』	井上友一郎	㊦『ハイネの月』
田宮 虎彦	㊦『絵本』	木山 捷平	『大陸の細道』
太宰 治	『人間失格』	野間 宏	『真空地帯』
武田 泰淳	『風媒花』	椎名 麟三	○『永遠なる序章』
梅崎 春生	『桜島』	三島由紀夫	○『金閣寺』

大岡 昇平	『俘虜記』	井上 靖	『獵獸』
中村真一郎	未定	福永 武彦	○『草の花』
遠藤 周作	■『海と毒薬』	堀田 善衛	『広場の孤独』
安部 公房	『他人の顔』	島尾 敏雄	●『死の棘』
安岡章太郎	●『海辺の光景』	吉行淳之介	●『娼婦の部屋』
曾野 綾子	●●『遠来の客たち』	阿川 弘之	『雲の墓標』
庄野 潤三	●●『静物』	有吉佐和子	『紀の川』
石原慎太郎	○『太陽の季節』	開高 健	○『裸の王様』
大江健三郎	○『死者の奢り』		

〔文語体のためにのぞかれた作家〕

坪内逍遙・尾崎紅葉・樋口一葉・徳富蘆花

〔ジャンルのためにのぞかれた文学者〕

石川啄木・正岡子規・高浜虚子・北原白秋・高村光太郎・萩原 朔太郎・柳 田 国男・斎藤茂吉・折口信夫・小林秀雄

(2) (1)で選ばれた作品の一部から、比喩意識をとまなう用例を、内省的方法によって判断し、次の規準にしたがって採集し、カード化した。

1) 範囲としては、いわゆる直喩・隱喩・諷喩・提喩・換喩・活喩とし、いわゆる声喩などはのぞく。

2) その形式・意味が通常の辞書に登録されていればとらない——今回は、『岩波国語辞典』（岩波書店1963）・『広辞苑』（岩波書店1955）・『国語慣用語辞典』（東京堂1969）をいちおうの規準とする。

これには、次のような種類・段階がふくまれる。

① 比喩として成立したと考えられるものでも、現代においてはふつう比喩・修辞の意識なしに使われ、受けとられていると予想されるもの。

＜例＞さるすべり・猫舌・火花・ぬか雨・枕木・口車・茶色

② もっぱら転義で使われ、原義ではほとんど使われないもの。

＜例＞迷宮入り・駆け出し・草葉の蔭・垂涎・牛歩・風呂敷・旗揚げ

- ③ 比喩的な用法が派生的意味として辞書に記載されるほど固定し、また、原義も基本的意味として使われるもの。

＜例＞渋い（じみだ・けちだ）・煙たい（きがねだ）・泥臭い（やぼったい）・釘づけ（動けなくすること）・狂言（いつわりしくむこと）・助け船（困っているときに力を貸してくれるもの）能書き（自己宣伝）

- ④ かなり一般的に使われるために辞書に記載された意味でも、「比喩的に」，「…のたとえ」などのことわり書きのついている段階のもの。

＜例＞沈没（酔いつぶれること）・巢立つ（子が成長して独立する）・根なし草（浮動して定まらない物・事）・手品（人をたくみにだます手段）・大名行列（大勢人を従えて出向くこと）・小股すくい（相手のすきにつけ入って自分の利益を図るしかた）・金脈（資金を引き出すあてのあるところ・人）

- ⑤ 慣用句・ことわざなどが，辞書と同じ形・同じ意味で使われたものの。

＜例＞足が出る・釘をさす・色をなす・うまい汁を吸う・猿も木から落ちる・老いては子に従え・きじも鳴かずばうたれまい

- 3) 作品・章などの全体が諷喩となっているばあいとはらない。

- 4) ただし，次のばあいは別とする。

- ① 2)の①～⑤に該当しても，比喩・修辞の意識の強く感じられるものはとる。

＜例＞壁（障害）に体当たりをする・日脚のコンパスが長くなる・知らぬが仏のご利益・（人が木から落ちるばあい・猿が芸をしそこねるばあいの）猿も木から落ちる

- ② 辞書に，「比喩的に」などのことわり書きなしにのっている用例が，たまたま比喩であるばあいは，2)の④とせずに，その類例をとる。

＜例＞雪のように白い・りんごのようなほお

- ③ 慣用となっていて、辞書に登録されていないものは、とる。

〈例〉出世街道・性格破産者・手涇（「足枷」は転義の記述があるからとらない）・眠りに落ちる・新感覚をふりかざす

- ④ 辞書の登録形とちがうばあいは、2)の⑤とせずに、とる。

〈例〉釘を打つ（釘をさす）・腹をこやす（私腹をこやす）・腹が真黒い（腹が黒い）・溜飲がおりる（溜飲がさがる）・猿だって木から落っこちるさ（猿も木から落ちる）

- ⑤ 辞書に記載された以外の意味で使われたものは、2)の⑤とせずに、とる。

〈例〉辻褄が合う（料理がなんとか食えるようにできる）

- ⑥ 声喩のために比喩的になるばあいは、全体としてとる。

〈例〉決心がぐらりぐらり動揺する

- ⑦ 活喩を広く考え、あるものを他のものとしてあつかったものをとる。
したがって、次のばあいはすべてふくまれる。

二 た と え る ヲ	人 間	動 物	生 物	物 体	抽 象 体
人 間	11	12	13	14	15
動 物	21	22	23	24	25
生 物	31	32	33	34	35
物 体	41	42	43	44	45
抽象体	51	52	53	54	55

《注》修辞学における活喩関係の用語のあらわす範囲は、諸書の定義・用例から、だいたい次のように考えられる。

{ 擬人法：21 31 41 51
 活喩法：21 31 41 51 42 52
 (32 43 44)
 擬物法：14 24 34
 (54 15 25 35)

〈例〉乞食の行幸11・おやじがほえたてる12・猫のさえずり22・娘の咲きはじめ13・群がる害虫を刈りとる23・年輪をかさねた芝生33・万巻のフィルム44・難解な器具類45・恋愛の初犯55

(1)の表中、●印のついた24編の作品については、用例採集およびそのカード化を完了し、○印のついた12編の作品については、用例採集を終えた。

- (3) (1)で選ばれ、(2)であつかわれなかった作品の一部について、語源的な比

喩や固定した比喩などのいわゆる dead metaphor をふくめ、なんらかの意味で比喩との関連を感じさせる全用例を、内省的判断によって採集し、カード化した。

(1)の表中、■印のついた9編の作品については、用例採集およびそのカード化を完了し、□印のついた3編の作品については、用例採集を終えた。

(4) (2)の2)に該当する比喩の固定化の諸段階の概略を実際の語句をもっておさえるために、『岩波国語辞典』から、次を手がかりとして、比喩に関連しそうな箇所を引きだした。

1) 『連語』と表示されているもの。〈例〉血の雨

2) 解説中に「よう」「みたい」「似た」などのあらわれたもの。〈例〉串刺し

3) 「転じて」「比喩的に」「たとえ」などとあるもの。〈例〉じゃじゃ馬

4) 「原義は」「もと」「古くは」「…から」「…の意」「…という意から」「…ところから」「…なのでこう呼ぶ」などの補足的説明のあるもの。〈例〉帝王切開

5) 語源の説明（外来語の原綴はのぞく）のあるもの。〈例〉せむし

6) 「よう」「みたい」「似た」などの語のあらわれた用例。〈例〉綿のように疲れる

7) あとに説明のついた用例。〈例〉腹の筋を搓る

(5) 比喩について、これまでどう考えられてきたか、どのような用例をどうあつかってきたか、また、今、どのような面についてのどのような研究がなされているかなどを知るために、諸文献の比喩関連箇所、特に、定義・範囲・分類・特徴・条件などに関する記述、および用例を集め、出典・項目・観点ごとにカード化した。今年度にとりあげた文献は次のとおりである。

辞典類28冊 単行本18冊 (講座・紀要・雑誌などの)論文7編

D 今後の予定

- (1) Cの(1)の表中の○印の作品の用例をカード化し、必要に応じて、無印の作品のいくつかをとりあげ、用例カードをふやす。
- (2) Cの(1)の表中の□印の作品の用例をカード化し、必要に応じて、無印の作品のうち(1)でとりあげなかったいくつかを使って、用例カードをふやす。
- (3) Cの(4)で印のついた箇所をカード化し、時間的余裕に応じて、普通語化した比喩起源の語と思われるものを内省的判断によって選びだし、カード化する。
- (4) Cの(5)の継続として、文献をふやし、カードを補充する。
- (5) (4)を整理する。
- (6) (3)を分類する。
- (7) (5)(6)の結果を参考にして、Cの(2)とDの(1)、およびCの(3)とDの(2)を分析し、Aの課題にそって考察をくわえ、分類・整理する。

(中村)

全国方言文法の対比研究

A 目 的 ・ 意 義

日本語の方言の文法を、相互に、また、標準語と比較できるかたちで、研究する。そのために、国立国語研究所地方研究員の協力をえて、沖縄をふくむ全国の方言について、統一的な方法による調査をおこなう。研究の重点を、方言の文法現象のうち、文の述語としてもちいられる各種形式の形態論的構造の記述におく。

この研究の目的は方言の文法について、統一的な方法による全国的規模の調査をおこなうことによって、今後の、方言および標準語の文法の各種の研究に必要な基礎資料をえることである。また、えられる資料は、方言地帯における標準語教育を改善するためにやくだつはずである。

なお、この研究は、地方言語研究室が昭和38年からおこなってきた「各地方言の共通語との対照的研究」をひきつぐものである。

B 担 当 者

話しことば研究室の上村幸雄，高田正治，衛藤蓉子の3名が担当した。また、今年度おこなった沖縄の諸方言の録音とテキスト化は、つぎのひとびとの協力によるものである。

内間直仁（東京都立大学大学院学生），大城健（琉球大学助教授），加治工真一（浦添高等学校教諭），新里幸昭（真和志中学校教諭），高橋俊三（国際大学講師），津波古敏子（宜野湾高等学校教諭），名嘉順一（真和志高等学校教諭），仲宗根政善（琉球大学教授），中松竹雄（東京教育大学大学院学生），野原三義（東京都立大学大学院学生），外間守善（法政大学教授），本村勝史（宮古高等学校教諭）

C 本年度の経過と今後の予定

本年度はつぎの仕事をおこなった。

(1) 41年度から43年度までの調査の結果の整理

結果の整理は45年度中におえる予定である。

(2) 補足のための調査

41年度から43年度までの調査を補足するために、八丈島および奄美諸島の喜界島において、文法の調査と録音資料の採集とをおこなった。補足のための調査は、45年度以降もつづける予定。

(3) 方言の録音とテキストの作成

前記の沖縄方言の研究者の協力によって、沖縄の諸方言について方言の録音とテキスト化（音声表記，標準語訳，注付き）をおこなった。

なお、話しことば研究室は、ほろびてゆく方言について今後に良質な研究資料をのこすために、方言資料の録音とテキスト化をこれまでもすすめてきたが（年報20 P.8参照），本年度からあらたに4年間の計画で、この仕事にとりくむこととした。収録の対象は、沖縄、奄美、八丈島など、国語史的に価値の高い離島の方言を主とするが、内陸部の方言（おもに僻地）もくわえる。4年間で約50地点の方言の録音とテキスト化とをおえる予定である。

（上村）

X 線像による調音運動の研究

A 目 的 ・ 意 義

標記の研究は、話しことば研究室が継続的におこないたいとかんがえている日本語音声の研究の一部をなすものである。音声の研究は、現代日本語の音声の音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴、指導法などをあきらかにすることを目的としておこなう。おもに標準語の音声を分析の対象とするが、今後は比較の必要から、方言や外国語の音声、また、病的異常のある音声も対象とすることがありうる。

B 担 当 者

話しことば研究室の上村幸雄と高田正治の 2 名が担当した。

C 本年度の作業

本年度も、ひきつづき X 線像による調音運動の研究をつづけ、標準語の個々の単音を発する際の X 線映画フィルム像の計測とトレース作業とおこなった。

また、分析の資料である X 線フィルム（約 500 フィート、24 コマ毎秒）を、分析に便利のように 4 部にわたり編集し、これに「X 線映画日本語の発音」という題をつけた。また、その内容を解説した小冊子「X 線映画『日本語の発音』について」を作成した。

D 今 後 の 予 定

上の研究は 45 年度もつづける。また、これまでの研究成果は、当初の予定より 1 年おくれて、45 年度中にまとめる。

（上村）

語の意味・用法の記述的研究

——動詞・形容詞等——

A 目 的

現代語の動詞・形容詞等の意味・用法を、言語作品の中で実際に使われた用例によって分析・記述する。

B 担 当 者

前年度にひきつづいて動詞は宮島達夫、形容詞等は西尾寅弥が担当し、高木翠が全般の作業を助けた。

C これまでの経過

昭和39～41年度に、大量の用例カードを作成してから、一語一語についてのくわしい記述を行なった（各論と仮称）。42年度から動詞全体、形容詞・形容動詞全体にわたる体系的・関係的な記述を目ざす総論（仮称）にとりかかった。

D 本年度の作業

語の意味を区別する特徴について分析・記述することを中心として、総論のしごとを進めた。

なお、現代語の動詞・形容詞等の用例カードが資料的に活用されることをねらいとして、次のような内容をもつ「動詞・形容詞資料集」を作成するしごとをはじめた。

動詞・形容詞資料集

(1) 辞典にない語とその用例

「あおじろむ」 自動五

○蒼白んだ信之の頬には、ちょっと苦笑ひが浮んで、すぐ消えた。

(多情仏心〔前〕 316)

○「なんの用なの、一体。」さき子が近づくと初めて津上は口を開いた。頬が蒼白んで、ひどく憔悴してゐた。(闘牛 104)

(ほかに「多情仏心〔前〕」2.「闘牛」1)

「あおずっぱい」 形

○雨に濡れた草の、青酸っぱい臭ひに混って、私のよく知ってゐる、あいつんと鼻をつく臭気が、緑の間に漂ってゐた。(野火 104)

(2) 逆びき一覧

(動詞單純語)

5 段活用

(ア行) あう、いう、おう(追)、おう(負)、おおう……

(動詞合成語)

(あがる) うかび～、うき～、おどり～……

(形容詞單純語)

(ク活) いい、かいい、かわいい、うい……

(形容詞合成語)

(あたらしい) こと～、なま～、ま～、みみ～、め～

(形容動詞の構成)

(やか) 名詞に: きわやか、つややか、はなやか、……

形容詞語幹に: あおやか、かろやか、ひろやか……

(3) 動詞の自他についての資料

「うれえる」

明 解	広 辞 苑 (初)	角 川	新 選	三 省 堂 (小)	岩 波	講 談 社	三 省 堂 (中)	広 辞 苑 (二)
自・他	自	自	自・他	自・他	他	他	他	他

○(他) そのうちで、教育委員会問題を心から憂えている者が何百人あ

ったろうか。(人間の壁〔上〕 73)

「しむける」

辞典はすべて他。

○(自) 実は春琴の発意ではなく周囲の者がさう仕向けたのであるともいふ。(春琴抄 157)

○(他) 葉子はその時十九だったが、既に幾人もの男に恋をし向けられて、その囲みを手際よく繰りぬけながら、自分の若い心を楽しませて行くタクトは十分に持ってるた。(或る女〔前〕 10)

(4) その他

E 今後の予定

この研究の結果を、45・46年度の2年間にわたって発表していく予定である。

(西尾)

日本言語地図作成のための研究

——作図ならびに検証調査——

A 目 的

現代日本語の基盤を地理的に展望し、かつ、日本語の歴史を言語地理学的に考察するために、日本言語地図（全6集、各集言語地図50面、参考地図1面）を作成する。

あわせて、日本言語地図に盛られている資料の性格を明らかにするための検証調査を行なう。

B 担 当 者

地図作成については、地方言語研究室の徳川宗賢、本堂寛、佐藤亮一、高田誠が共同してあたり、白沢宏枝、中野文子（旧姓山本）が協力した。また、非常勤職員W・A・グロータースほか多くの人々の援助を受けた。

検証調査には、地方言語研究室の徳川宗賢、本堂寛、佐藤亮一、高田誠のほか、野元菊雄、齋賀秀夫、宮島達夫が参加した。

C 本年度の作業

昨年度までの経過は「年報20」を見られたい。

日本言語地図の作図・編修については、第4集（生活・農業に関する名詞など言語地図50面、参考地図として調査地点の産業図1面を含む）編修のための作業を行なった。この第4集は、昭和45年3月に刊行された。

検証調査については、昭和45年3月に、兵庫県揖保郡新宮町から岡山県勝田郡勝央町にかけての地域と、岡山県笠岡市から香川県善通寺市にかけての両地域で、次のような調査を行なった。日本言語地図の資料には種々の関連項目がある。たとえば質問番号264、265、266（地図2集66図、67図、68図）に

は「材木をひとりでかつぐ」「天秤棒をかつぐ」「ふたりでもっこをかつぐ」に関する項目がある。その結果、各調査地点については、これらの項目に関する地点ごとの構造が明らかになり、全国的にはその地理的分布の概略を知ることができた。かくて、異なる構造が地理的に接している場合、その中間の地域で客観点にどのような現象がみられるか（一線をもって明確に限られるのか、漸層的に推移するのか、など）が問題となる。今回は、両地域において、日本言語地図の「かつぐ」に関する諸項目を中心として、調査地点の地理的間隔をできるだけちぢめて、意味構造の地域差に関する微視的調査を行なった。調査項目49、調査地点は兵庫・岡山間71地点、岡山・香川間52地点である。

D 今後の予定

日本言語地図の作図・編修の作業は、6集完結まで続ける。その期間に毎年新しい観点による検証調査を企画し実行する。検証調査全般の詳しい内容および結果については、機会を改めて報告する。

（徳川）

高校生の漢字力に関する研究

A 目 的・意 義

当用漢字を読み書きする能力が、義務教育段階では不十分であることが、中学生の漢字習得に関する研究で明らかになったので、より高次な高校教育課程を履修し、より豊かな言語生活を経験する高校生では、それがどこまで到達されるか、高校生の漢字使用力の様相・程度はどのようなものであるか、漢字習得上の問題点は何かについて調査研究しようとするものである。

中学生の漢字習得結果と関連させて高校生を対象に当用漢字の読み書きの力を調べたところに、この調査の特色がある。

B 担 当 者

芦沢節，根本今朝男（特に漢字使用力の調査）が担当，川又瑠璃子，小林信子がこれを助けた。なお，臨時補助者が，一部の集計作業を助けた。

また，前年度から継続の報告書『中学生の漢字習得に関する研究』の刊行のため，上掲の芦沢・根本および，この研究に従事した中村明（話しことば研究室）が，それぞれ，各自分担の部分を執筆，原稿をまとめた。その集計整理作業等については，川又・小林があたった。

C これまでの経過

中学生の漢字習得調査の結果，義務教育終了段階では，当用漢字の読み書きについて，未学習，未習得文字（特に読みでは未習得の音・訓）があり，習得上の問題が残されたので，それが，その後のより高次な高校教育，豊かな言語生活などを経た高校終了段階では，どの程度解決できるかを見るために，卒業直前の高校生について，中学生で，その読み書きについて問題となった当用漢字を中心とした漢字の調査を，次の要領で実施した。

調査問題 I	調査文字数	調査用紙
(1) 教育漢字の読み	165字 (182音訓)	2枚
(2) " の書き	170字	4枚
(3) 教育漢字外当用漢字の読み	265字 (303音訓)	4枚
(4) " の書き	750字	15枚

調査問題 II

- (1) かながき文章の漢字かなまじり文章化 2枚 (作業指示文とも)
(2) " 2枚 (")

所要時間 120分強 (進学時期を控え、調査時間が多くとれないので、被調査者を二分して問題に当たるようにし、ひとりあたりの負担量を少なくするようにした。その際1人が、問題IまたはIIの、ある問題のみに偏しないように均衡を保ちながら、それぞれの問題を実施するように依頼した。そのため各問題実施の生徒数が予定より減少した。)

調査の実施校

東京 都立目黒高等学校
" " 杉並高等学校
大阪 市立東高等学校
" 府立園芸高等学校
愛知 県立豊橋東高等学校
" 国府高等学校

(各校 3学級分とし、進学組<理科系・文科系>、就職組等の配分を考えたが、進学間際のため学校によっては一律に配分できなかった。しかし、実業高校も加わり、種々の高校生の漢字力の実態を知ることができた。)

調査実施時期 昭和44年1月21日～2月8日

D 本年度の作業

I 「中学生の漢字習得に関する研究」についてのまとめ

報告書『中学生の漢字習得に関する研究』の刊行のために、各担当者が執

筆分担し、原稿をまとめた。出版は次年度の予定。

おもな内容

第1編 調査のねらい・方法・問題作成

第2編 漢字習得の実態に関する研究

量的観点からの習得状況

質的観点からの習得状況

教育漢字・教育漢字外当用漢字の読みの習得状況

読みの習得上の特徴

読みにおける音訓の問題

音優位の字、訓優位の字

教育漢字・教育漢字外当用漢字の書きの習得状況

書きにおける教育漢字と教育漢字外当用漢字の問題点

当用漢字習得についての考察

漢字習得過程にみられる習得のゆれ現象

教科書の学習文字と習得

表外字の読みとその習得経路

誤答分析

誤答反応にみられる習得過程

誤答傾向における個人差

読み書き反応と書字の正答の関係

習得上の問題点解明のための集団調査とその結果

第3編 習得要因に関する研究

事例調査生徒の人間像（知能・学力・身体・性格・行動・家庭環境・学習状況・読書など）

国語科学習指導の実際

漢字学習と諸要因との関係（知能と、国語学力と、読書・読書力と、学習上の工夫と、学習の好悪と、作文と）

第4編 事例研究一（1人の中学生の3年間の漢字習得状況）一

3年間に習得した漢字、学習者として見た生徒

漢字習得の型，知能・性格・家庭環境などと漢字習得
生徒自身の経験と漢字習得

第5編 中学校の漢字学習指導の実態に関する調査

調査の目的・方法

漢字学習指導の方法，漢字学習指導の内容など

〃 〃 に対する意見など

資料編

I 中学校の教科書における漢字の出現状況調査

II 教科書漢字出現状況一覧表

III 当用漢字全数調査問題提出語形一覧

IV 漢字習得に関する実態調査の文献

II 高校生の漢字力に関する研究

1 中学校卒業段階で問題のある漢字の読み書き調査

本年度は，43年度末に実施した，中学校卒業段階で問題を持ちこした文字について，その読み書きの力をみる調査——高校生の漢字力調査の一環——について，その集計整理作業に集中する予定であったが，報告書『中学生の漢字習得に関する研究』のまとめに時間がさかれたために，調査の結果をまとめるまでには至らず，一部整理を終える段階にとどまった。

2 高校生の漢字使用に関する調査

1の調査のうち，かながき文章の漢字かなまじり文章化のテスト実施の結果，高校生の漢字使用力の調査を進めることになり，とりあえず，いわゆる備考漢字115字のうち，一部の漢字について，その漢字が使用されている主要な語（1字につき5～20語）を書かせ，漢字使用力の様相・程度を精査するテストを，次の要領で行なった。

調査の実施校

東京 都立井草高等学校

〃 〃 大山 〃

東京 都立明正高等学校

“ “ 両国 “

各校各2年生2学級分の生徒を調査対象とした。

調査実施時期 昭和45年2月

整理集計作業 一部素集計の段階を終え、次年度に続行。

Ⅲ 「中学校卒業段階で問題のある漢字の読み書き調査」の結果のあらまし

中学校卒業段階で問題を持ち越した漢字を、高校生はどの程度まで読み書きできるようになるか、1の調査のうち、調査問題1の第一次の集計結果から次のように概観できる。

教育漢字の読み書き

(読み)

中学卒業段階で、音訓の観点から問題のある音または訓を中心に、165字・182音訓（中には対照的に他の音または訓で調べる、あるいは同じ音訓のものについて、提出語をかえて調べるなどしたので、調査対象の延べ文字は210音訓となる。テスト方法 問題のある文字〈語〉にかなをつけさせる。その際、なるべく前後によって、その読みかたが誘導されないように単語中心とする）について調べた。

高校卒業段階であるから、中学生と比べると、総体的にかなり読めるようになり、平均正答率90%以上の字がふえた。

90%以上（73字）80%～（31）70%～（15）60%～（16）50%～（11）40%～（4）30%～（6）20%～（1）10%～（7）10%以下（1）

平均正答率90%以上73字，80%以上31字で，調査文字の半数以上は，正答率80%以上読めている。たとえば，中学生では問題のあった音訓も，

90%～

遣^ユ 焼^{シヨウ} 勸^{カン} 今^{イマ} 戸^コ 女^メ 是^{コノ} 川^{カハ} 暴^{ハルカ} 発^{ハツ} 衣^イ 逆^{サカ} 参^マ 室^{シツ} 設^{セツ} 断^{ダン}

80%～

的^{テキ} 難^{カン} 負^フ 放^{ハツ} 練^{レン} 音^{オン} 反^{ハン} 州^{シュ} 舌^{ゼツ} 納^{ナツ} 苦^ク 採^{サイ} 唱^{テウ} 欲^{ヨク}

など、大多数のものが読める、しかも、中には、戸数(94.2)・一戸建て(92.9)、負ける(97.3)・負う(95.3)、豊富(99.0)・富む(99.0)のように、提出語や音訓をかえても、同様に90%以上読める定着率の高いものがあり、音訓や提出語による正答率の差が縮まっているものがある、それぞれの文字に対する読みの力が安定し、習熟度がみられる文字がふえている。このことは、古典・漢文等、国語学習が広域にわたったこと、読書の領域がひろがったことなどによる漢字力の向上を示しているものと思われる。しかし、その反面、義務教育中に、読み書きともに習熟の段階に到達されるべき教育漢字でありながら、依然として、一部の音訓の中には、問題のあることが認められる。

平均正答率50%以上

遠^ト 供^{キョウ} (織^{オリ}) タセ 宗^{ソウ} 望^{モウ} 緑^{リョク} 価^カ 眼^{マナコ} 興^{オモヒ} 面^{おもて} 由^{よし}

40%以上

* 宮^{ミヤ} 業^{ゴウ} 玉^{ギョウ} 赤^{シヤク} 各^{おの} 政^{まつりごと}

30%以上

回^ヘ 蚕^{サナ} (内^{ウチ}) 坂^{サカ} 因^ユ 潔^{いさぎよ} 天^{あめ}

20%以上

殺^サ (各^{おの})

10%以上

衆^{シュ} 読^{トク} 白^{ビロク} 基^{もと} 統^と 否^{いな} 奮^{ふん} (民^{タタ})

10%以下

行^{ユキ} (天^{テン})

*は重出の文字であることを示す。() つきのものは、同じ音訓で提出語をかえて重出し、正答反応に有意差のあるもの。

これらは、他の一般的な読み方では、中学生で既に100%読めており、い

ずれも問題のあった音訓での読みの結果であるが、中学生段階とほとんど変わっていない。もっとも、中には、内^イ(境内>参内 94.5/30.4)、政(摂政>政を司る 82.2/42.1)、織^ヅ(織機>交織音読みと指示、69.8/53.3)、供(供出>供える>供物・節供 80.0/78.9/51.5・53.8)のように、提出語や音訓によって正答率に有意の差がみられるものもあり、中学校段階よりは、前進しているが、まだ習熟の段階には至っていない文字もある。しかも、これらの現象は、解熱97.7/解毒89.6、毒舌83.8/筆舌61.7、矢印91.8/目印81.4、衣替え95.1/羽衣85.8、室町時代98.5/室咲き34.5のように、この期の高校生の語彙理解の程度や範囲をも示していると思われる。なお、彼等の学習の範囲や関心の領域からはずれる語彙では、抵抗のある音訓があって、中学生で成績の低かった殺^イ衆^シ読^ト基^モ統^トなどの一連のものは、高校生でも読めていない。

以上、音訓や提出語をかえても正答率に高低のない定着度の高い文字がふえている反面、提出語によっては、まだ定着できないでいる文字や、未習得音訓があるというのが、高校生における教育漢字の読みの実態といえる。

これら一連の読みは、今後、どこで、正しく読めるようにされるか、大学教育でか、社会での自然習得によるか、正しい読みの習得の方法についての考慮が、今後の問題となると思われる。

(書き)

中学3年卒業時に全員(100%)は書けなかった110字を中心に、書きの調査で問題のあった文字計170字(実際には、提出語をかえて調べたものもあり、延べ字数は多い。かなを添えた□の中に、漢字を記入させる方法で、たずねる文字〈語〉の意味がよく理解できるように、文脈・語脈中に位置づけた)を調べた。

90%以上(87字) 80%~(46) 70%~(24) 60%~(6) 50%~(3)
40%~(3) 20%~(1)

90%以上 惡遺永宮衛易億解革確 拈^{*}株管則貴逆^{*}許境均禁 陰^{*}限減故誤功効
号票康 黄祭際財罪策察酸息視 似識授宿術準処暑^{*}勝焼 戰綵像

増属退単賃提程 適典徒徳燃破飯肥評布 武返便満務迷盟浴欲陸
率留料領礼連輸

80% ～ 需^{*}供訓系検固護后妻採 齒資兒謝借述純^{*}初除^{*}招 承称仁是制績宣
蔵俗損 貸氷停敵展党湯版俵複 奮編墓暴預臨

70% " 积幹勸規旗潔兼嚴孝候 講穀蚕氏就祝象鼻専貯 難揮未余

60% " 刊補衆拾張博

50% " 飲低底

40% " 壺券陸

20% " 式

(注)ゴチの字は音・訓ともに、あるいは、提出語形をかえた場合でも、同率またはほとんど同率に書けるもの。*印の字は提出語形一主として音訓のちがいによって成績に変動のあるもの。ここでは、成績のよいほうに位置づけてある。

総体的にはよく書けるようになったが、中学で成績の低い字は、やはり成績が悪い。しかも、壺式陸のように日常生活性の乏しい字はおいても、問題のある字の多くが、点画の細部による誤答である——正しい字形がとりにくいことに注目される。その意味からは、両段階の間に大きな進歩は見られないともいえよう。しかし、一方

90%以上(同じ正答率を保つもの)

簡単 ・ 単純
暑い ・ 暑中見舞
燃料 ・ 燃える
破る ・ 破壊する

80%以上(同じ正答率を保つもの)

知と仁と勇 ・ 仁義
述語 ・ 述べる
招待 ・ 招く
預金 ・ 預ける

90%以上(語によって異なるもの)

拡大 (拡声機 83.1)
国境 (境遇 84.9)
勝つ (優勝 87.3)

80%以上(語によって異なるもの)

供給 (供える 62.4)
最初 (初め 59.0)
除く (加減乗除 73.9)

のように、提出語や音訓を変えても、同じ正答率を保つもの、生徒に親しい

語句・音訓では相当の成績で書けるが、そうでない場合は、有意の反応差を示すというように、中学時代より、使用力の深まりはみえるが、教育漢字を書く力も、高校終了段階でなお、引き続き問題を残していることがわかる。

教育漢字外当用漢字の読み

教育漢字外当用漢字の読みは、265字・303音訓（提出語を変えて調べているので、実際には、もっと多い）について調べたが、80%以上の平均正答率をあげた字は141字あり、かなり読めるようになっていることがわかる。

90%以上 逮^{*カ} 轄^カ 含^ガ 巧^カ 隠^カ 弦^カ 更^カ 紛^カ 沿^カ 威^カ 窮^カ 驚^カ 駭^カ 顧^カ

飢^カ 餓^カ 香^カ 弓^カ 拒^カ 避^カ 絞^カ 囚^カ 疾^カ 療^カ 既^カ 衰^カ 詳^カ 冗^カ

突^カ 襲^カ 趣^カ 射^カ 克^カ 遂^カ 讓^カ 隔^カ 辱^カ 赦^カ 焦^カ 吹^カ 奏^カ 崇^カ

請^カ 奪^カ 危^カ 媒^カ 介^カ 卑^カ 薦^カ 双^カ 装^カ 捕^カ 嘆^カ 抽^カ 罰^カ 怒^カ

薄^カ 占^カ 阻^カ 憎^カ 替^カ 陳^カ 漂^カ 墨^カ 誘^カ 飽^カ 裂^カ 網^カ 優^カ 癖^カ

妨^カ 埋^カ 擁^カ 崩^カ 壞^カ 陰^カ 謀^カ 抑^カ

80% 押^カ 悔^カ 喚^カ 宜^カ 禍^カ 閑^カ 偽^カ 叫^カ 堪^カ 祈^カ 拘^カ 甘^カ 控^カ 虐^カ

縁^カ 皆^カ 陷^カ 緩^カ 御^カ 沸^カ 札^カ 碎^カ 託^カ 祥^カ 緒^カ 若^カ 漆^カ 剛^カ

醜^カ 裁^カ 如^カ 侵^カ 枝^カ 寿^カ 殉^カ 葬^カ 怠^カ 升^カ 頂^カ 添^カ 篤^カ 懲^カ

堤^カ 袋^カ 鍛^カ 艇^カ 僧^カ 縛^カ 締^カ 繁^カ 貞^カ 慕^カ 降^カ 芳^カ 營^カ 丘^カ

陵^カ 漏^カ 摘^カ 猶^カ 庸^カ 降^カ 伏^カ

(注) ゴチの字は、音・訓ともに、あるいは、提出語形をかえた場合でも、同率またはほとんど同率に読めるもの。*印の字は提出語形——主として音訓のち

がいによって、読みの成績に変動のあるもの。ここでは、成績のよいほうに位置づけてある。

しかし、一方に、平均正答率60%以下の文字も四分の一近くあり、これらの中には、中学で問題のあった読みが、そのまま残存しているものもある。

50%~60% 携^{たづさえる} 寡^カ 斤^シ 暫^ザ 辛^{からい} 潤^{うる} 沼^{シロウ} 肅^{シユク} 詔^{ミことりの} 勅^{チロク} 浸^{ひたす} 昔^{サキ} 迭^{テッ} 逐^{チク}
潜^{ひそむ} 墮^オ 憤^{いふこころ} 廉^{レン} 寡^カ 賄^ツ

40%~ 嚇^{カク} 款^{カウ} 泣^{キユウ} 謁^{ニョク} 穴^{ケツ} 干^{カン} 旨^チ 諮^シ 囑^{シヨク} 洩^{ジユウ} 操^{ミサオ} 衷^{チュウ} 巢^{ソウ} 粘^{ネバ}

* 弔^{とむらう} 頤^イ 腰^{ヨウ} 翻^{ひるがえる}

30%~ 曉^{ゴウ} 綱^{コウ} 勺^{シヤク} 嫡^{チヤク} 被^{コウ} 敷^フ 謠^{ラウ}

20%~ 虚^コ 鼓^コ 遵^{ジュン} 伯^{ハク} 礎^ソ 通^{ツウ} 井^{セイ} 舟^{シュウ} 弘^フ 苗^{ビョウ} 匄^ゲ

10%~ 虞^オ 燕^{セン} 嗣^シ 刃^ニ 施^セ 充^{チュウ} 敵^{テキ} 浦^ホ

10%以下 叔^{シク} 璽^シ 婿^{セイ}

0 穂^ホ 鍾^{チュウ}

教育漢字の読みでもそうであったが、教育漢字外当用漢字でも文字によっては、90%以上 疾(疾風・疾病) 衰(衰える・衰弱) 謀(陰謀・無謀)
80%以上 閑(閑静・農閑期) 甘(甘露・甘美) 皆(皆無・皆既食) 繁(繁盛・繁茂)のように、提出語形や音・訓にかかわらず同じ正答率となり、安定しているものもあるが、多くは、

90%~

直轄(管轄 86.2)

更に(更迭 54.7)

紛糾(紛れる 69.8)

避難(忌避 61.2)

駆ける(駆逐 73.2)

顧問(顧みる 87.5)

容赦（特赦 78.2）

窮屈（窮める 54.7）

詳しい（詳細 72.9）

奪う（争奪 72.8）

未遂（遂行83.1 遂げる86.6）

香具山（芳香56.7, 花の香26.0）

80%～

残虐（虐殺 78.6）

懲罰（懲らす 51.2）

陥いる（陥落 62.7）

丘陵（陵 6.4）

醜い（醜態 78.6）

制御（御意45.1 御璽6.6）

漏電（漏れる73.2・漏る61.2）

のように、提出語や音訓によって、正答率に高低があり、単に文字というよりは、その文字を含む語への親疎の度がひびいていることがわかる。

また、50%以下の読めない文字では、反対に、低い正答率として固定しているものがみられる。（30%～今暁・払暁 20%～払底・払暁 育苗箱・種苗 10%～自刃・刀刃など）

正答率の低い文字の中には、当用漢字補正案で、当用漢字から削られる候補の字（寡嶽頒逡逋虞璽）もあり、また、使用例の極少のもの（浦^{*} 井^{*}），現在使用されなくなっている用語に関するもの（斤勺匄^{*}），特殊な用語に限って使用されるもの（苗^{ヒナ} 鍾^{ショウ} 嫡）などもあるが、他の多くは、生活上、教養上読めなくては不自由するものである。今後の問題として、教育漢字と同様、これらの正しい読みが、どこでどのように習得されるか調べる必要と、正しい読み方が教えられる必要とを感じるのである。

進路との関係

この漢字調査では、①広く高校生一般の漢字力を見る、②各進路による学習・言語環境などと漢字力との関係を見るという目的から、進学組、就職組の生徒、実業高校の生徒を対象としたが、調査時が、大学受験期に接近していたためと、テストにさきうる時間が乏しかったため、学校によっては、それぞれの系統に属する生徒の配分が行なわれず、理科系生徒の数が少ないというアンバランスな配分になった。したがって②については所期の目的を果

たすことができなかったが、各字種についての正答反応を仔細に見ると、進路の差や特徴を察知することができそうである。

理科系の生徒数が、各問題とも約50人（テストの所要時間等の関係で、問題を分割実施したために、各問題に対する被調査者数が減った。このことは、文科系、就職組も同様）に対し、文科系約120人、就職組約150人で、バランスを欠くが、こうした条件下で、次のような現象を見ることができる。

- ① 全体的にみると、文科系が3グループの中では読み書きともに優位を示しているが、他は大差がみられず、就職組、理科系の順位になっている。

- ② その傾向の中でも

教育漢字の読みは 文科 就職 理科の順
(83.3% 73.2% 71.5% 平均77.6%)

〃 書き 文科 就職 理科の順
(89.5 84.9 80.1 〃 87.0)

教育漢字外当用漢字の読み 文科 理科 就職の順
(78.2 65.7 63.7 〃 70.3)

と、総体的に不振を示した理科系が教育漢字外当用漢字の読みに対しては、やや優位であるのは、教育漢字と教育漢字外当用漢字の字種の差と進路指導・学力・言語環境と漢字力に何等かの関係があるのではないかと思われる。

（教育漢字の読み）

文科系83.3%，就職組73.2%，理科系71.5%と、文科系が総体的にすぐれ、就職組がこれに次ぎ、理科系がやや低いが、前述のように、理科系の人数は、他のグループの二分の一ないし三分の一にあたり、必ずしも理科系の漢字力を反映しているといい難い。しかし、個々の文字についてみた場合、次のような現象がある。

文字（語）	文科	理科	就職
会は……の下もに行なわれた	99.1	80.0	67.6

黑白 ^{ビヤク} を正す	20.7	11.4	7.0
衆 ^{シユ} 生	23.0	18.2	7.9
衆生 ^{ジヨウ}	37.7	25.0	15.9
その外 ^{ほか}	97.3	91.4	72.5
最期 ^ゴ	85.6	65.7	53.5
摂政 ^{シヨウ}	91.8	88.6	69.5
政 ^{マツ} を司 ^シ る	64.8	34.1	11.9
久遠 ^{キウエン} の光	89.3	61.4	55.6
〇〇県〇〇町字 ^キ 〇〇	82.9	45.7	85.9
元 ^キ 手	88.3	88.6	90.8
歩合	95.5	88.6	93.0
発起人	98.2	88.6	97.6
借用	96.4	88.6	96.5
矢印 ^{ジヨウ}	89.2	77.1	93.7
相殺 ^{サイ}	19.7	27.3	43.7
預 ^ヨ 金	64.8	36.4	70.2 (貯に誤読する)
貸借	68.9	34.1	83.4
貸借	86.9	79.5	95.4

文字（語）によって、不振の理科系にも優位を示すもの、常に優位の文科系をおさえて就職組に優位のもののあることが認められる。進路による古典の学習、読書の領域、教科に密着した用字・用語等の違いが、漢字習得の字種に影響するとみることができよう。なお、費やす（95.5 97.1 98.6）富む（100 100 97.7）豊富（100 95.5 98.7）設ける（98.4 100 99.3）能率（96.7 97.7 97.4）など、進路にほとんど関係なく習得が安定している文字もある。

（教育漢字の書き）

書字についても同じことがいえる。

文字（語）	文科	理科	就職	文字（語）	文科	理科	就職
金属	91.9	100	95.3	式	25.2	8.7	31.9
貸す	82.9	85.3	83.5	株式会社	96.1	91.3	100
低い	65.8	70.4	61.4	需要	79.6	69.6	87.0
博物館	72.1	85.2	55.9	供給	87.8	77.8	92.0
余る	76.3	80.0	79.2	入場券	42.7	21.7	45.7
臨時	89.7	91.4	80.0	蚕をかう	72.5	60.9	84.4
借りる	87.3	91.3	91.4				

文科は一応おいて、理科優位、就職組優位の文字に、それぞれ何等かの関連性、必然性があるように見受けられる。ことに就職課程では、教科の学習内容や関心事項との関係がある文字（語）に有意差がみられる。また、3グループほとんど同率のものは満留料礼連輸率欲浴暴返盟などで、この段階になれば、一般に高校生としてだれでもこの程度には書ける、定着度の高い字といえることができる。

（教育漢字外当用漢字の読み）

教育漢字では、就職組よりやや低かった理科系が、逆によく読めているのが目立つ現象といえる。一概には言えないが、就職組と進学組の国語学習の内容、読書活動や関心事項の差などが教育漢字外当用漢字のほうにより顕著に関連するところがあるからであろう。

文科系に関連するところがあると思われる字（語）

	文	理	就		文	理	就
押収	92.9	83.3	75.6	虚空	51.5	20.0	19.8
便宜	94.9	70.0	77.9	白刃	20.9	12.1	1.5
朽ちる	89.9	66.7	58.0	陵 ^{みささぎ}	8.3	2.8	2.2
不朽	80.8	80.0	62.6	昔 ^き 日 ^ひ	81.0	44.4	34.6

理科系に関連するところがあると思われる字（語）

	文 理 就				文 理 就		
該当	74.7	83.3	47.3	争奪	79.0	92.6	58.5
一斤	52.5	63.3	52.7	舟艇	93.0	96.3	80.8
制御	98.3	100	91.7	諮問	54.8	66.7	41.4
抑制	89.0	94.4	91.9	控 ^{ひかえる}	85.9	90.0	84.7
更迭	55.0	63.9	60.3	潤 ^{うるわう}	56.5	84.9	50.4

就職組に関連するところがあると思われる字（語）

	文 理 就				文 理 就		
借款	35.4	30.0	53.4	風袋 ^{フイ}	57.0	22.2	62.3
御中	86.1	60.6	86.5	(cf.田山花袋	97.0	63.0	81.5)
(cf.御意	54.8	54.6	30.8)	藪 ^{ヤブ} 糸	14.8	9.1	21.8
普譜	35.0	18.5	47.7	藪 ^{ヤブ}	76.5	45.5	77.4
下請け	99.0	85.2	98.5	裁つ	80.0	81.8	85.7
(cf.請う	86.0	81.5	35.4)	充てる	12.0	18.5	21.5
育苗 ^{ビョウ}	33.0	11.1	38.2	詳細	73.9	60.6	75.9
種苗	29.4	13.9	33.1	(cf.詳しい	100	100	97.7)

3グループ同率のもの（陰謀 隠居 顧問 疾風・病 囚人 冗談 媒介推薦 逮捕 陳列 誘う 交通網など。なお、逮捕は、3グループともに100%読めており、正答率が高いが、当時の社会的事件との関連からではないかと思われる。）

今回の調査では、進路と漢字習得の関係については、被調査者のアンバランスから所期の目的をはたすことができなかったが、人数をふやし、各グループ等分にして調査すれば、進路と習得の関係や問題がさらに明らかになるであろう。

E 今後の予定

報告書作成のために、高校生の漢字調査の結果の整理がはかどらなかったが、教育漢字外当用漢字の書きの結果も整理して、義務教育から引きつがれた高校生の漢字力の問題の大要を把握し、その上に立って、高校生の読める漢字の範囲と語彙力との関係、高校生の漢字使用の問題を中心に、研究を進めたいと思っている。

（芦沢）

就学前児童の言語能力に関する全国調査

A 目 的・意 義

幼児，児童，生徒が言語，文字をどのように習得し，どのように使用するか，またその要因はなにか等を明らかにする言語発達の研究は，国語教育，とくに，その教育計画や指導法の確立，改善のために欠くことのできぬ基礎的な仕事として重視されなければならない。本調査は3年計画で就学前児童の言語能力の習得の過程および条件を全国的規模で明らかにしようとするものであり，本年度は調査の最終年次として，就学前児童の語彙・コミュニケーション能力調査を行なった。

B 担 当 者

本調査に関する計画，立案，実施は，国語教育研究室の村石昭三，天野清の2名が担当し，福田昭子がこの作業を助けた。さらに調査の諸段階でテスト作成専門員（3名），準備・前調査幼稚園および小学校（1幼稚園，1小学校），本調査幼稚園（30園），調査員（34名），実験協力園（2園）の協力を得た。

C これまでの経過

「就学前児童の言語能力に関する全国調査」は昭和42年度から始まった。
▽昭和42年度 就学前児童の文字力調査
（調査1）読み書き水準調査——就学前児童の文字力の全国的水準を明らかにするために，平がなの清音，撥音，濁音，半濁音の読み書きテスト，拗音，長音，拗長音，促音および助詞「は」「へ」の読みテストを，東京，東北，近畿の3地方の全幼稚園から層別抽出した122幼稚園，2235名（4・5歳児クラス）について行なった。

(調査2) 特定幼児の文字調査——就学前児童がどの程度の範囲の文字をどれだけ読み書きできるかを、平かな、片かな、漢字、アルファベット、数字にわたり、全国の18特定幼稚園の幼児72名(4・5歳児クラス)について追跡調査した。

▽昭和43年度 就学前児童の語彙力調査

就学前児童の基本的な語の理解水準を明らかにするために、東京、東北(宮城・岩手)、近畿(京都・和歌山)の各地方の幼稚園から抽出した延べ36園、918名の就学前児童(4・5歳児クラス)を対象に、A、B、C、Dの絵図テストを実施した。

A 範疇化テスト——上位概念の形成過程を、1)語の理解、2)自由分類・同類選択、3)カテゴリーの命名、4)絵カードの選択の各テストによって調べた。

B 性状語テスト——ものの大きさ、高さ等をあらわす13対26語について1)単語の系、2)単語・事物の系、3)パラメータの分離、4)系列化の各テストによって調べた。

C 時間・空間語テスト——時間・空間語の系をつくるための基本語となる38語について、1)単語の系、2)単語・事物の系、3)位置変換、4)時間判断の各テストによって調べた。

D 動詞分化テスト——基本的な動詞をどの程度に使い分けしているかを1)自動詞と他動詞の使い分け、2)楽器に関連している動詞の使い分け、3)生物・無生物の存在をあらわす動詞「ある」「いる」の使い分け、4)「切る」ことに関連した動詞の使い分け、5)「作る」ことに関連した動詞の使い分け、6)「を」格、「に」格を支配する動詞の習得の程度とその使い分けの各テストによって調べた。

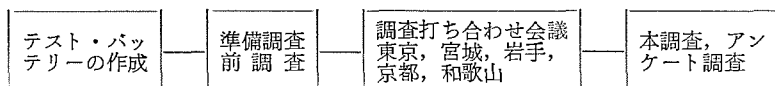
D 本年度の作業

調査概要 就学前児童の語い・コミュニケーション能力調査

東京、東北(宮城・岩手)、近畿(京都・和歌山)の各地方の幼稚園から、

抽出した延べ36園，1188名の就学前児童（4・5歳児クラス）を対象に，基本的な動詞の理解水準ならびにコミュニケーションの水準をテスト法によって明らかにした。一方，被調査園，家庭を対象にしたアンケート調査から就学前児童の言語生活，言語指導法に関する実態調査を行なった。

（調査手順）



（調査者数）

本調査における調査地区と被調査者の人数配分は次の通りである。

地 区		語彙力テスト	コミュニケーション能力テスト	
			文の作成・変換	物語の再生・伝達
東 京		153	77	180
東 北	宮 城	164	—	—
	岩 手	165	—	—
近 畿	京 都	161	82	—
	和 歌 山	137	69	—

調査1 就学前児童の語彙（動詞）力テスト

（動詞の選定）

基本的な動詞，220語を中心に理解の水準をテスト法によって明らかにした。各動詞は，日本語の動詞のうち，幼児の生活のなかでよく使用され，しかも将来，幼児が日本語の動詞の系をつくりあげるための基本となる単語という観点から選んだ。選定に先だって，次の各種の資料により共通度の高い語をまず抽出した。

- ・ 特定幼児の表現語彙集
- ・ 文部省『児童，生徒の語い力の調査（低学年）』
- ・ 国際文化振興会『日本語基本語彙』

・阪本一郎『教育基本語彙』

・国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字』

その上で、さらに次の選択基準を設けて、220語を確定した。①複合語はのぞく（例：追いかける）②敬語動詞はのぞく（例：いらっしゃる）③俗語はのぞく（例：食う）④自動詞・他動詞は絵になりやすいもの、対の系が明白なものを優先する、⑤使役、可能、受身動詞は基本形で提出する。⑥多義語は基本的な意味で提出する。ただし、系の成立の関係で、上記の基準にかかわらず選ばれたものもある。たとえば、21（受け取る）は複合語であるが、7（預ける）の対語として提出してあるなど。

〔語彙表〕

*印の単語は2回以上提出してあることを示す。（ ）内のは単純の動詞以外のもので形容詞や連語形式のものなど。

- | | | | |
|-----------|------------|-----------|---------------------------|
| ・ 1 会う | * 2 あがる | ・ 3 明ける | * 4 開ける |
| * 5 上げる | ・ 6 揚げる | ・ 7 預ける | ・ 8 与える |
| ・ 9 あたためる | * 10 当たる | ・ 11 集める | ・ 12 あまる |
| ・ 13 編む | ・ 14 あやまる | ・ 15 洗う | ・ 16 ある |
| * 17 歩く | ・ 18 いじめる | ・ 19 いれる | ・ 20 浮かぶ |
| ・ 21 受け取る | ・ 22 受ける | ・ 23 動かす | ・ 24 歌う |
| * 25 打つ | ・ 26 奪う | ・ 27 生まれる | ・ 28 うめる |
| ・ 29 売る | ・ 30 追う | ・ 31 起きる | ・ 32 置く |
| ・ 33 送る | ・ 34 おくれる | * 35 起こす | ・ 36 怒る <small>おこ</small> |
| ・ 37 押さえる | * 38 教える | ・ 39 押す | ・ 40 おちる |
| ・ 41 落とす | ・ 42 踊る | ・ 43 （同じ） | ・ 44 おぼれる |
| * 45 おりる | ・ 46 折る | * 47 おろす | ・ 48 終わる |
| ・ 49 買う | ・ 50 帰る | ・ 51 懼る | * 52 書く |
| ・ 53 隠れる | * 54 掛ける | ・ 55 駆ける | ・ 56 固まる |
| ・ 57 勝つ | ・ 58 かつぐ | ・ 59 悲しむ | ・ 60 かぶる |
| ・ 61 枯れる | ・ 62 かわいがる | ・ 63 乾く | ・ 64 消える |
| ・ 65 聞く | ・ 66 切る | ・ 67 着る | ・ 68 （きれいになる） |

・ 69 切れる	・ 70 来る	・ 71 暮れる	・ 72 加える
*73 消す	・ 74 答える	・ 75 混む	・ 76 殺す
・ 77 ころぶ	・ 78 こわす	*79 咲く	・ 80 下げる
*81 さす(差・刺)	・ 82 さわぐ	*83 しかる	・ 84 敷く
・ 85 しげる	・ 86 (静かにする)	・ 87 沈む	・ 88 死ぬ
・ 89 しばる	*90 しぼむ	・ 91 しぼる	*92 しまう
・ 93 閉める	・ 94 締める	・ 95 知る	・ 96 吸う
・ 97 空く	・ 98 進む	・ 99 すてる	・ 100 すわる
・ 101 せおう	・ 102 せばまる	・ 103 攻める	・ 104 そらす
・ 105 倒す	*106 出す	・ 107 助かる	*108 尋ねる
*109 たたく	*110 畳む	・ 111 立つ	・ 112 食べる
・ 113 (たりない)	・ 114 違う	・ 115 ちぢめる	・ 116 散らかす
・ 117 散る	・ 118 つかまえる	*119 つく(点・着)	・ 120 つける
・ 121 続く	・ 122 包む	・ 123 つながる	*124 つなぐ
・ 125 つぶる	・ 126 つぼめる	・ 127 積む	・ 128 出かける
・ 129 出る	*130 解く	・ 131 溶ける	・ 132 閉じる
・ 133 届ける	・ 134 飛ぶ	・ 135 跳ぶ	*136 止まる
・ 137 止める	・ 138 とる	・ 139 (ない)	・ 140 直す
・ 141 治る	・ 142 泣く	・ 143 なぐる	*144 投げる
*145 なでる	・ 146 なめる	・ 147 習う	・ 148 鳴らす
・ 149 ならべる	*150 にかす	・ 151 握る	・ 152 逃げる
・ 153 煮る	*154 抜く	*155 脱ぐ	・ 156 塗る
・ 157 濡れる	・ 158 寝かす	・ 159 寝る	・ 160 乗せる
*161 延ばす	・ 162 のぼる	*163 乗る	・ 164 はいる
・ 165 履く	・ 166 吐く	・ 167 はじまる	・ 168 走る
*169 はずす	・ 170 はずれる	・ 171 話す	・ 172 放す
*173 離す	*174 離れる	・ 175 はめる	・ 176 払う
*177 貼る	・ 178 引く	・ 179 弾く	・ 180 冷やす
*181 拾う	・ 182 広がる	・ 183 広げる	・ 184 拭く

・ 185 吹く	*186 ふくらむ	・ 187 太る	・ 188 ふやす
・ 189 降る	*190 減らす	・ 191 ほす	・ 192 ほどく
・ 193 ほめる	・ 194 掘る	・ 195 巻く	・ 196 負ける
*197 曲げる	・ 198 まぜる	・ 199 守る	・ 200 みえる
・ 201 迎える	・ 202 結ぶ	・ 203 燃す	・ 204 戻る
*205 もらう	・ 206 焼く	・ 207 やせる	・ 208 破る
・ 209 止 ^あ む	・ 210 やる	*211 行く	・ 212 よごれる
・ 213 寄せる	・ 214 読む	・ 215 喜ぶ	・ 216 わかす
*217 別れる	・ 218 わける	・ 219 忘れる	*220 笑う

〔テストの構成〕

テスト語彙，220 語の動詞を均等に 4 群に分け，各被調査者は各 1 群につき，約30～40分の調査時間をかけて，対語^{*}，対文^{*}，対絵^{*}の各テストを受けた。

(*) 対文・対絵にはそれぞれ対関係をあらわす語および絵が配してある。

(A) 対語テスト——動詞に関連した単語の系の中で位置づけて理解しているかを調べる。

全語（4 対10語ないし13語^{*}）について行ない，反応が登録語以外の語（○，×，×）の場合はその語を登録し，新しい語反応が出なくなるまでテストをくりかえす。

例：ツクの反対は？ 答。キエルの反対は？ 答

(B) 対文テスト——動詞に関連した文の系の中で位置づけて理解しているかを調べる。

全文（6 対12文ないし18文^{*}）について行ない，反応が登録語以外の語（○，×，×）の場合はその語を含む文を登録し，新しい語反応が出なくなるまでテストをくりかえす。

例：あかりがツクの反対は，あかりが？ 答。あかりがキエルの反対は，あかりが？ 答。

(C) 対絵テスト——動詞をそれが指示する事象(絵図)と結びつけて理解しているかを調べる。

1. 発 語 全絵(35対70絵^{*})について行ない、必要な動詞を自発的に言わせる。

例：(バスに乗り降りしている二つの絵を示しながら)「こっちは男の人がバスに[?]，こっちは男の人がバスから[?]。

2. 誘導発語 発語テストのうち、登録語反応(○)をのぞく他のすべての語について、対の絵動詞を誘導しながら言わせる。

例：(上記の例で「ノル」が言えなかった場合、二つの絵を示しながら)こっちは男の人がバスからオリルところでしょう。だから、こっちは男の人がバスに[?]。

3. 語 認 知 誘導発語テストのうち、登録語反応(○)をのぞく他のすべての語について、対の絵動詞を含む当該ページを提示しながら、必要な絵図を指示させる。

例：(上記の例で「ノル」が言えなかった場合、その絵動詞を含む当該ページを提示しながら)，これらの絵の中で、何かにノルところの絵はどれでしょう。指でさしてください。

＊それぞれ単一の群の中における語数，文数，絵図数を示す。

調査2 就学前児童のコミュニケーション能力テスト

〔A. 文の作成・変換テスト〕

幼児が文をつくるルールを習得していく過程を明らかにするために、昨年度の「動詞分化テスト」に引きつづいて、4, 5, 6歳の幼児を対象に、文の作成・変換に関する次の課題を与え、その習得の程度を調べた。

(A) 能動文の作成

主語＋対象語(を格)＋動詞の構文をもつもの4問

例 1)猫はネズミを食べた

2)犬は猫を追いかけた

〔B〕受動文の作成

主語＋対象語（に格）＋動詞（受動）の構文をもつもの4問

例 1)クマはハチにさされた

2)犬は自動車にひかれた

〔C〕能動＝受動変換

（A）、（B）の各能動、受動文を相互に受動、能動文につくりかえるもの8問。および能動文の所有の「の」格と受動文の主格が相互に変わる文（犬は太郎の手をなめた→太郎は犬に手をなめられた）について2問。

〔D〕使役変換

一定の文を使役文につくりかえる問題5問

例 犬がソリをひいた→太郎は犬にソリをひかせた

子グマがお皿を洗った→お母さんは子グマにお皿を洗わせた

〔E〕補助動詞「あげる」「もらう」を利用した文の変換。

例えば「花子は太郎にハサミをかしてあげた」

「太郎は花子にハサミをかしてもらった」という文を相互につくり出す。6問。

〔F〕選択法による能動文、受動文の理解テスト

主・客の立場が相互に異なる二つの絵をみせ、実験者の話す文に応じて絵を選択させることにより、能動、受動文の理解の程度を調べる。

例 クマは犬をだいている。犬はクマをだいている。

犬はクマにだかれている。クマは犬にだかれている。

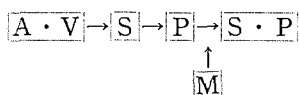
上記の（F）を除くすべてのテストは、付属する図版と積木を用いて、図版の絵であらわされている内容を、絵の下にかかれているマス目と絵であらわされている文の語構造を示す文モデルにそって、そのマス目に一つ一つ積木をおかせながら、一定の型の文を作成させるという方法で行なった。

〔B. 物語の再生・伝達テスト〕

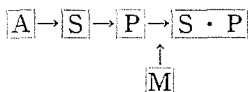
幼児のコミュニケーション能力の特質を明らかにするために、短い物語を再生・伝達させる課題を与え、その言語行動を分析した。

テストは、年少、年中、年長各60名を対象に、条件の異なる次の3グループをつくって、実施した。

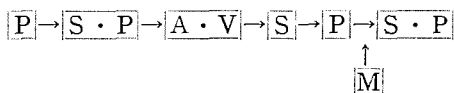
A. 視聴グループ（スライド）



B. 聴取グループ



C. コントロールグループ



A・V；スライドとテープによる視聴，A；テープ聴取，S；話の作成，P；絵カードの配列，S・P；配列された絵カードをみながらの話の作成，M；実験者による絵カード配列の修正

○物語；「タヌキさんとリング」

○被験者；3，4，5，6歳児 計180名

（テストの作成分担）

各テストの作成に際しての、責任分担および専門員の協力は次の通りである。

調査1 就学前児童の語彙力テスト 村石昭三，〔専門員〕大日方重利（東京教育大学 大学院），高木和子（東京教育大学 大学院）

調査2 就学前児童のコミュニケーション能力テスト 天野 清，〔専門員〕牛島めぐみ（東京教育大学 大学院）

〔被調査園〕

園 名	住 所
(東京地区 6 園)	
まきば幼稚園	東京都板橋区徳丸2—9—7
亀戸幼稚園	〃 江東区亀戸4—17—3
道灌山幼稚園	〃 荒川区西日暮里4—7—15
九段幼稚園	〃 千代田区三番町16—1
ほぜんじ幼稚園	〃 中野区上高田1—31—2
翼蔭幼稚園	〃 田無市向台町2—5—1
(宮城地区 6 園)	
東岡幼稚園	仙台市原町南目字町67
お人形社幼稚園	〃 北五番丁50
聖和幼稚園	〃 木ノ下21—5
仲よし幼稚園	〃 榴岡21
小さき花幼稚園	〃 疊屋丁31
東仙台幼稚園	〃 燕沢字苗代沢東30
(岩手地区 6 園)	
わかば幼稚園	岩手県岩手郡雫石町源太堂
おさなご幼稚園	〃 上閉伊郡大槌町桜木町2—24
あづま幼稚園	〃 紫波郡紫波町土館字内川26—1
金ヶ崎聖母幼稚園	〃 胆沢郡金ヶ崎町表小路6
清心幼稚園	〃 東磐井郡千厩町字町浦51
摺沢幼稚園	〃 〃 大東町摺沢字観音堂86
(京都地区 6 園)	
明倫幼稚園	京都市中京区室町蛸薬師下ル
京極幼稚園	〃 上京区塔ノ段藪ノ下町428
待賢幼稚園	〃 〃 猪熊通丸太町下ル
伏見板橋幼稚園	〃 伏見区下板橋町610
慧日幼稚園	〃 東山区本町15丁目

(和歌山地区 6 園)

南部幼稚園 ” 日高郡南部町芝松原

〔調査員〕

(東京地区)

青木 剛士（東教大 大学院生） 片山美津子（東教大 大学院生）
新井邦二郎（東教大 大学院生） 三津山柁江（東教大 大学院生）
内野康人之（東教大 大学院生） 江川 洋子（東京・豊島区教育委員会嘱託）
小林 幸子（東教大 大学院生）

(宮城地区)

高橋 巖（聖和短大 助教授）	木村 進（東北大 大学院生）
内海 瞭子（聖和短大 助教授）	佐藤 淑子（東北大 大学院生）
永瀬 治郎（東北大 大学院生）	玉川 公代（東北大 大学院生）

(岩手地区)

坂口 忠（宮古市教育委員会）	牧野 誠一（岩手大 専攻科学生）
大沢 博（岩手大 助教授）	大日方重利（東教大 大学院生）
倉島 敬治（岩手大 講師）	高木 和子（東教大 大学院生）

(京都地区)

長田 久男（京都市教研 所員） 本田 勇（京都市教研 所員）
山田 典男（京都市教研 所員） 駒田 朋子（京都大 大学院生）
磯島 良夫（京都市教研 所員） 寺田ひろ子（京都大 大学院生）
吉岡 克己（京都市教研 所員） 塹江 光子（京都大 研修員）

(和歌山地区)

関 嶋一（和歌山大 助教授） 小藪 晴美（和歌山大 学生）

桜井 義則（和歌山大 学生）

武本 節子（和歌山大 学生）

谷口 真一（和歌山大 学生）

南館 忠智（三重大 助教授）

神徳 広美（和歌山大 学生）

〔調査経過〕

5 月・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための語彙・コミュニケーション能力テストの作成専門員会議を開いた。

6 月・コミュニケーション能力テスト（文の作成・変換）の準備調査を、東京・王子保育園で実施した。

・語彙力（動詞）テスト試案を完成した。

7 月・語彙力テスト試案による準備調査を東京・王子保育園、埼玉・川口南幼稚園で実施した。

・特定語に関する実験調査を国立国語研究所で行なった。被験者は東京・帝京幼稚園児。

8 月・語彙力テストのための動詞カードを作成した。

9 月・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための被調査園を30幼稚園に委嘱した。

10 月・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための調査員を34名に委嘱した。

・語彙力テスト第2次試案による準備調査を東京・西原小学校で実施した。

11 月・語彙・コミュニケーション能力テストの前調査を、東京・王子保育園、埼玉・川口南幼稚園で実施した。

12 月・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための被調査者を抽出した。

1 月・語彙・コミュニケーション能力調査のための諸調査票を完成した。

・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための実施打ち合わせ会議を調査員・幼稚園代表者と次の5会場で行なった。

（東京地区）東京・まきば幼稚園，（京都地区）京都・明倫幼稚園，

（和歌山地区）和歌山・湯浅幼稚園，（宮城地区）仙台・東岡幼稚園
（岩手地区）盛岡・青山幼稚園

・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」の本調査を実施した。

（1月下旬～2月下旬）

3月・被調査園30園，被調査者家庭 1,008 家庭に対してアンケート調査を行なった。

・特定語に関する実験調査を国立国語研究所で行なった。被験者は東京・帝京幼稚園児。

E 今後の予定

本年度をもって「就学前児童の言語能力に関する全国調査」は終了した。45年度以降は調査の集計および必要な検証補充調査を加えながら，「就学前児童の文字力」「就学前児童の語彙力」「就学前児童のコミュニケーション能力」に関する報告書を順次，作成する予定である。

（村石）

言語の表現機能と伝達効果の研究

A 目 的・意 義

この研究は言語の表現機能や伝達効果を、言語そのものとの関連において、とらえようとするものであるが、表現機能や伝達効果と言語の法則性との関連する事項のうち、まず、つぎのⅠとⅡのふたつのテーマをとりあげた。

- Ⅰ 言語表現における場面の効果の研究……場面によって言語表現がどのような変容を示すかを、伝達という観点からしらべ、あわせて、場面の分析および表現の分析をおこなうことを目的とする。場面が表現に影響するもののうち、現在は、「主語の有無と場面の関係」をしらべるための研究をすすめている。
- Ⅱ 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究……幼児のコミュニケーション機能の発達は、言語の獲得あるいは言語活動の形式の分化のなかに、さまざまな形であらわれる。言語の表現機能と伝達効果を、幼児の文表現が成立し、文形式が形成されていく過程でとらえようとする。

B 担 当 者

Ⅰは高橋太郎が担当し、Ⅱは、主として大久保愛が担当し、一部（動詞の形態および名詞の格）を高橋太郎がうけもった。また、Ⅰ、Ⅱを通じて、鈴木美都代が作業をたすけた。

C これまでの経過

Ⅰ 言語表現における場面の効果の研究

主語の有無を場面との関係において問題にするばあい、まず、文における

・主語の役割から問題にしかかからなければならない。なぜなら、ある主語の省略が場面の影響であるというためには、その文の本来の文型では主語を必要とすることがわかっていなければならないし、また、ある主語の存在が場面の影響であるというためには、その本来の文型では主語を必要としないことがあきらかでなければならないからである。そのために、まず「文における主語の役割」をあきらかにすることを目的として、「主語と述語の関係」についての分析、とくに述語の形式の分類などをすすめてきた。

この分析のために、種類も豊富で大量の資料を得やすい、文章にあらわれた使用例をデータとしてつかうことにし、文庫本、全集などを材料として、カード化してきた。43年度までに、話しことば研究室および書きことば研究室と共同で、49の文学作品および14の論文ないし評論・解説文からのべ約50万枚（ことなり約1万8千枚）のカードを採集した。

Ⅱ 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究

幼児のばあい、言語行動の能力は、言語使用能力ときわめて密接な関係をもっているので、幼児の使用する言語の分析からはじめることとした。まず幼児期における一応の到達点（乳児期よりはじまる言語獲得過程の、一応の到達点）として、4～6歳児の使用する言語の実態を分析することからはじめた。伝達活動の言語的な単位は、（幼児のばあい、しばしば、未完成文のなかに伝達の単位を見いだすことができるが）陳述の完成する文であるとされているので、文の構文論的な分析を主として、その構成要素である単語の形態論的な分析をこれにくわえて、研究をつづけてきた。これまでに、4～6歳児の文型の概観、連体修飾法、補足文、動詞の形態、名詞の格のつかいかた、文末形式の種類などについて分析した。

幼児の言語を具体的に分析するためには、大量の資料を必要とするので、幼児の言語を録音し、それを文字化してカードにする方式をとった。42年度までに、年長児115名、年中児46名、計161名についての録音を文字化して、のべ約16万枚（ことなり約3千枚）のカードと、それを製本した3種の「ことばカード集」を作成、さらに43年には、年少児38名のおとなとの対話、な

らびに3児（3歳，4歳，5歳）の家庭における自由な場面での発話を録音し，これらを文字化した。

D 本年度の作業

I 言語表現における場面の効果の研究

本年度は，述語の形式の分類をすすめる一方，述語となる動詞のアスペクトを分析し，また，ムードを分析するためのカード採集をはじめた。

II 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究

本年度は次の三つの作業を行なった。

(1) 年少児の資料のカード集およびカード化

42年度に採集した年少児（3歳5か月～4歳7か月）の資料を，『幼児のことばカード集——幼稚園児のことば資料V』，および，ことばのカード約4万枚として印刷した。

(2) 自由な場面での資料採集

3児のことばを自然な場面で録音文字化したもののカード集およびカード化。

これは印刷所のつごうで45年度はじめに完成する予定。そのための原稿の整理と，一部校正を行なった。

(3) 分析

今年度は，これまでに分析してきた「連体修飾語の用法」「文末形式の種類」について，補充した資料カードを使って，分類・整理し，年少，年中，年長の比較を試みた。また，昨年度の継続として，「名詞の格の用法」の調査のうち「に格」の分析を行なった。その他，今年度あらたに手をつけた分析としては，「従属文の形式」「接続詞の用法」がある。

E 今後の予定

IもIIも年度をへるにしたがってすこしずつ内容が拡大してきたので，次年度は，分析をIIにしぼって，まとめる方向で研究をすすめる。（高橋）

明治時代語の研究

——明治初期における漢語の研究——

A 目 的・意 義

明治初期は、現代語の源流となった時代であり、日本の近代化が始まった時代である。この近代化にともない、日本語は大きく変化した。中でも、語彙の変化がはげしく、それは漢語にもっとも著しく反映している。そこで、明治初期の各種文献に現われた漢語の実態を調査し、現在の漢語と比較対照する。さらに、大正期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって、明治以降における漢語、漢字表記の変遷の条件と方向とをきわめ、現代語成立の歴史的背景を明らかにしようとする。

B 担 当 者

飛田良文・松井利彦が共同して作業にあたり、牧野正子がこれを助けた。

C これまでの作業経過

近代語研究室では、昭和30年度以降、明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行ない、その成果については、そのつど年報または報告書に発表してきた（『年報』7～20、および『明治初期の新聞の用語—報告15』参照）。昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し、明治初期漢語辞書[8]種の総索引を作成し、現在、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との調査を行なっている。

D 本年度の作業

明治初期の漢語研究のため、次の作業を行なった。

- (1) 漢語に関する著書・論文目録の作成
- (2) 『花柳春話』のカード採集と分析

(3) 近代語資料の調査

その成果は、次の通りである。

(1) 漢語研究に関する著書・論文目録の作成

本年度は、以下に掲げるものを調査し、漢語に関係のある著書・論文名を書き出した。

『維新史料』（『幕末明治研究雑誌目次集覧』＜朝倉治彦，柳生四郎編 昭和43年刊所収＞）

『開国史料』（同上）

『江戸会雑誌』（同上）

『江戸会誌』（同上）

『史談会速記録』（同上）

『講演速記録（温知会）』（同上）

『講演速記録（維新史料編纂会）』（同上）

『名家談叢』（同上）

『同方会報告』（同上）

『同方会誌』（同上）

『旧幕府』（同上）

『武士時代』（同上）

『江戸』（同上）

『新旧時代』（同上）

『明治文化研究（昭3～昭4）』（同上）

『明治文化』（同上）

『明治文化研究（昭9～昭10）』（同上）

『開化』（同上）

『長崎談叢』（第1～40輯）総目録

『人類学会雑誌第1～300号総目録』（アチック・ミュージアム編纂「文献索引」昭和11年刊所収）

『東京学士会院雑誌』（岡野他家夫著「日本近代名著と文献」所収）

『東洋学芸雑誌第1～99号総目録』（アチック・ミュージアム編纂「文献索隠」

昭和11年刊所収）

『明治以降国語国字関係刊行書目』（国立国語研究所資料集4，1955年刊）

（2）『花柳春話』のカード採集と分析

(a)作業 『欧州奇事花柳春話』（初編～附録，5冊）の文節カードを，五十音順に配列し，点検を行なった。

『通俗花柳話』（初編～四編，4冊）は，2編～4編のカード採集を完了し，初編～4編の全カードを五十音順に配列した。文節の定義は，「年報 20」（P. 47～48）参照。

(b)調査 『欧州奇事花柳春話』の点検の段階で，表記のゆれている和語，読み方のゆれている漢語（漢語サ変動詞を含む），現代と読み方・意味・字順の異なっている漢語に気付いたので，そのうちのいくつかを例示しておく。（ ）内は「編一頁一行」を示す。なお，印刷の都合で例文の漢字の旧字体・変体がなほ現行の字体に改めたものがある。

①表記のゆれている和語

〔うしろ（後・背）〕

〈後ロ〉

・此時突然後ロニ聲アリ（2—8—10）

・マルツラバース驚キ起テ後ロヲ願ミレハ小男アリ（2—8—11）

〈背〉

・マルツラバース其背ニ立テ曰ク（4—39—5）

〔こうべ（首・頭）〕

〈首〉

・シサリニ首ヲ振り默シテ答エス（2—62—4）

・暫ラクシテベンタドア首ヲ揚ケ低言シテ曰ク（3—59—1）

・フロレンス首ヲ擡ゲテ獨語メ曰ク（4—86—7）

・君ハ櫓ニ凭テ首ヲ低レ（5—47—4）

〈頭〉

- ・左腕^{ラン}ニ其頭^{カウベ}ヲ抱^{イダ}キ冷水^{レイスイキ}ヲロニ含^{ジュシン}ンテ朱唇^シニ灑^シキ去ル (1—56—2)

〔ただ (只・徒・唯・惟) 〕

〈只・只タ〉

- ・只徒^{イタツ}ラニ今日^{オモ}ノ事ヲ憶^{オモ}フノミ (1—34—1)
- ・又喜^{イタツ}フニ足^{イタツ}ルト雖^{イタツ}モ只恨^{イタツ}ラク子^{イタツ}ヲ路上^{イタツ}ニ見^{イタツ}テ此約^{イタツ}ヲ爲^{イタツ}サ、ルヲ (2—132—5)
- ・只^{イタツ}タ其法^{イタツ}ニ從^{イタツ}フノ謂^{イタツ}ヒヲ云^{イタツ}フノミ (3—35—12)
- ・昔^{イタツ}ヨリ只書^{イタツ}ノミヲ讀^{イタツ}テ其著^{イタツ}者^{イタツ}ノ如何^{イタツ}ヲ熟知^{イタツ}スルモノハ幾^{イタツ}ント稀^{イタツ}レナリ (4—5—6)

- ・只^{イタツ}タ願^{イタツ}フ君^{イタツ}ノ幸福^{イタツ}ナルヲト (4—67—2)

〈徒々・徒タ〉

- ・心未^{イタツ}タ定^{イタツ}ラス徒^{イタツ}々^{イタツ}吾^{イタツ}カ才智^{イタツ}乏^{イタツ}シテ (2—55—7)
- ・徒^{イタツ}々^{イタツ}默^{イタツ}シテ頻^{イタツ}リニ孟^{イタツ}ヲ傾^{イタツ}ク (3—86—1)

〈唯・唯タ・唯々〉

- ・唯^{イタツ}悲^{イタツ}風^{イタツ}ノ颯^{イタツ}々^{イタツ}トノ草^{イタツ}蕪^{イタツ}ニ戰^{イタツ}グラ聞^{イタツ}クノミ (1—1—8)
- ・唯^{イタツ}彼^{イタツ}レノ心^{イタツ}終^{イタツ}ニ決^{イタツ}シテ王^{イタツ}公^{イタツ}ニ嫁^{イタツ}センヲ願^{イタツ}フアルノミ (3—100—10)
- ・唯^{イタツ}々^{イタツ}空^{イタツ}シク海^{イタツ}波^{イタツ}ノ依^{イタツ}然^{イタツ}タルヲ看^{イタツ}ルノミ (2—10—8)
- ・唯^{イタツ}々^{イタツ}數^{イタツ}點^{イタツ}ノ星^{イタツ}光^{イタツ}海^{イタツ}波^{イタツ}ヲ照^{イタツ}ラシ (2—25—9)
- ・唯^{イタツ}々^{イタツ}拳^{イタツ}々^{イタツ}トシテ業^{イタツ}ヲ勤^{イタツ}メ (3—31—12)
- ・唯^{イタツ}々^{イタツ}妾^{イタツ}ノ富^{イタツ}貴^{イタツ}ヲ得^{イタツ}ンカ爲^{イタツ}メニ假^{イタツ}情^{イタツ}ヲ通^{イタツ}ズルモノナリ (4—71—3)
- ・尋^{イタツ}常^{イタツ}ノ比^{イタツ}ニ非^{イタツ}ラザレバ唯^{イタツ}々^{イタツ}君^{イタツ}永^{イタツ}ク其恩^{イタツ}ヲ忘^{イタツ}ザランヲ欲^{イタツ}スルノミ (5—32—5)

〈惟〉

- ・見^{イタツ}ルヘキノ文^{イタツ}ナク惟^{イタツ}視^{イタツ}聽^{イタツ}ニ由^{イタツ}テ學^{イタツ}フニ過^{イタツ}キサリキ (1—49—10)

〔たとえ (設・縦・設令・假令・縦令) 〕

〈設へ〉

- ・余^{イタツ}レ設^{イタツ}ヘ今日^{イタツ}酒^{イタツ}ヲ過^{イタツ}グスルモ明日^{イタツ}ハ必^{イタツ}ス之^{イタツ}ヲ償^{イタツ}フ (1—17—1)
- ・設^{イタツ}ヘ富^{イタツ}貴^{イタツ}ヲ以^{イタツ}テスルモ女^{イタツ}ノ心^{イタツ}ヲ動^{イタツ}カスヲ能^{イタツ}ハサルヲ諷^{イタツ}スルナリ (3—97—11)

- ・設^{タト}へ君マルツラバースト小異アルモ（4—33—4）

〈縦へ〉

- ・君縦^{タト}へ之ヲ知ルトモ亦如何トモスベカラス（4—88—3）

〈設令〉

- ・僕思フニ設^{タト}令へ今此命ヲ下スモ（4—8—11）
- ・設^{タト}令へ君ノ父然ルアルモ亦一種殊別^{シユベツ}ノ友人アリテ（4—39—5）

〈假令〉

- ・假^{タト}令へ十分ノ冀望^{カバウ}ヲ達^{タツ}スルヲ能ハサルモ（1—54—7）
- ・假^{タト}令へ余レ友人と談話スルモ何ノ妨カ之レアラン（5—45—9）

〈縦令〉

- ・余縦^{タト}令へ不幸ニシテ貧^{ビン}窮^{ボウ}ノ中ニ苦メト（1—3—4）
- ・縦^{タト}令へ人間ニ在ルノ日少^{スクナシ}ト雖^レ氏猶ホ後世アリ（2—136—9）
- ・縦^{タト}令へ巨^{キョウ}萬^{マン}ノ倭^{エイ}堅^{ジニ}アリト雖^レ氏必ス大事ヲ爲スヲ得ン（3—120—10）

〔まことに（眞・誠・洵）〕

〈眞ニ〉

- ・僕カ意眞^{マコト}ニ外國人ナリト謂フニ非ス（1—11—8）

〈誠ニ〉

- ・君カ言誠^{コトマコト}ニ信^{ホントウ}ナリ（1—11—1）
- ・誠^{マコト}ニ僅^{キン}々然タルモノナリ（3—83—5）
- ・子ノ言誠^{マコト}ニ信^{シン}ナルヤ（3—88—5）
- ・君ノ言誠^{マコト}ニ理^リアリ（4—46—8）

〈洵ニ〉

- ・婦曰ク洵^{マコト}ニ然リ（4—16—1）
- ・果^{マコト}ゾ侯ノ言ノ如クナラハ洵^{マコト}ニ喜^{ヨロコ}ブヘシト雖^レ氏獨^{ネンレイ}リ其年齡ノ相^{タキ}適^{タキ}セサルヲ如何ン
（4—57—4）
- ・良^{リヤウジン}人ノ言^{マコト}、洵^{マコト}ニ然リト雖^レ氏是天^{テン}運^{ウン}ノ然ラシムル所ニモ（5—14—2）
- ・能^{シヤク}ク人ノ情^ウ實^ウヲ穿^ウツガ如キハ洵^{マコト}ニ稀^マレニモ（5—33—3）

②読み方のゆれている漢語

〔カイすとゲす（解）〕

〈解ス〉

- ・妾、君カ意ヲ解スル^{カイ}能ハス（1—34—5）
- ・マルツラバース善ク此理ヲ解^{カイ}シ終生^{シユウセイ}己レノ醜美ヲ論ゼサリキ（2—15—1）
- ・僕殆^{ホト}ント其意ヲ解スル^{カイ}能ハス（3—64—12）
- ・余彼レノ性質^{セイシツ}ヲ解スル^{カイ}能ハス（3—100—2）
- ・其詩意ヲ解スル者ト誤察^{ゴサツ}シ（4—31—10）
- ・僕之ヲ解スル能ハズ（4—54—2）

〈解ス〉

- ・兒未タ大翁ノ意ヲ解スル^ゲ能ハス（1—4—6）
- ・未タ其語意ヲ解スル^ゲ能ハス（3—53—10）
- ・余熟^{ツクツク}タ子ヲ見ルニ物理ノ全ク解^ゲシ難キ者ニ非ラス（2—131—9）
- ・君ノ言眞ニ解^ゲシ難シ（4—37—12）
- ・君ノ言ハ悉ク權謀ニ出テ、解^ゲシ易カラス（3—103—7）

〔コウジョウとコウセイ（厚情）〕

〈厚情〉

- ・彼レ其厚情^{コウセイ}ノ辭シ難キヲ以テ遂ニ諾シテ（3—43—6）
- ・主人ノ厚情^{コウセイ}ヲ受ケ茲ニ一泊メ（4—100—1）

〈厚情〉

- ・將ニ主人ノ厚情^{コウセイ}ヲ辭セントスル時、（1—8—9）
- ・主人ノ厚情^{コウセイ}ニ戻ルヲ快シトセス（1—9—1）
- ・君ノ厚情^{コウセイ}謝スルニ餘リアリ（2—45—5）
- ・僕、君等ノ厚情^{コウセイ}ニ懷ツキ故郷ヲ忘レテ淹留スル^{エンリウ}既ニ久サシ（2—76—8）
- ・マルツラバース謝^{シヤ}メ曰ク君ノ厚情^{コウセイ}實ニ謝スル所ヲ知ラズト（5—18—6）

〔ソンケイとソンキョウ（尊敬）〕

〈尊敬〉

・君ヲ友^{イウシ}視スルノミナラス又君ヲ^{ソントイ}尊敬シ（2—82—11）

・君ノ鴻恩^{コウオン}ヲ思ヒ永ク君ヲ^{ソントイ}尊敬セントスト（3—57—7）

＜尊敬＞

・心ニ君ヲ^{ソントイ}尊敬スルコト猶ホ神ニ於ルカ如シ（4—5—3）

・女子ノ天性美麗ニシテ衆人之ヲ^{ソントイ}尊敬シ（4—23—1）

〔チョウボウとチョウモウ（眺望）〕

＜眺望＞

・舟ヲ岸下ニ繫キ^{テウバウ}眺望ニ時ヲ移シテ吟聲ノ絶ユルモ也タ知ラサリキ（2—45—11）

＜眺望＞

・數十名ノ旅客船上ニ出テ海面ノ風景ヲ^{カイメン フウケイ テウモウ}眺望ス（5—12—9）

〔ドウギョウとドウコウ（同行）〕

＜同行＞

・一日一^{ソウ}船一^{ソウ}僧ニ逢ヒ^ア街上ヲ^{カイ}同行ス（2—117—6）

＜同行＞

・子ト或ル家^{ドウカウ}ニ同行シテ同ク晚餐ヲ^{バンサン}喫センカ爲メナリ（3—121—2）

・同行ノ人多シテ親話スル^{ドウカウ}能ハス（3—43—11）

・僕モ亦子等ト同行シテ共ニ^{ドウカウ}龍動ニ歸ラン（5—34—1）

③現代と読み方のちがう漢語

〔行程〕

・日モ亦暮^ヒレ行程^{ギヤウテイ}猶ホ數里アリ（3—4—3）

〔功名〕

・吾レ誓^{チカツ}テ功名^{コウメイ}ヲ好マサルヘシ（2—74—3）

・是レ終ニ功名^{アヒ コウメイ}ヲ得ル所以ナリ（3—25—1）

・我輩ノ鈍才ヲ以テ功名^{ドンサイ}ヲ求ルハ^{コウメイ}恰モ舟人ノ^{モトム}兒子タルカ如シ（3—30—8）

〔詩歌〕

・談^{ダン}ヲ伊國ノ詩歌^{シカ}ニ移シ（3—99—6）

〔是非〕

- ・幸イテンブルトンノ隣家ニ在ルヲ以テ先ツ其事ノ是非ヲ問ヒ (2—110—4)

〔差別〕

- ・窮迫ノ時ニ臨ンテハ彼我ノ差別ヲ問フニ違マアラス (4—35—11)

〔打撲〕

- ・設ヘ人ノ打撲ニ遇フモ曾テ覺ルナシ (1—15—1)

〔淡雲〕

- ・妾ノ心ハ朦朧トシテ春月ノ如ク空ク淡雲ノ中ニ在ツテ常ニ樂マス (3—57—2)

〔男女〕

- ・此時滿堂ノ衆客男女トナク老弱トナク盡ク眼ヲ兩人ニ注キ (3—97—9)
- ・路傍ノ男女或ハ手帕ヲ揚ゲ (5—75—1)

〔女王〕

- ・宮内省ニ出テ初メテ女王ニ謁ス可ケレバ (4—56—5)

〔女子〕

- ・町ト天下無情ナルモノハ女子ナリ (3—101—9)

④現代と意味のちがう漢語

〔事故〕

- ・今日止ヲ得サルノ事故アリテ外出ス (1—82—3)
- ・此クノ如キ事故ハ婦女ノ思考ヨリ出ルヲ以テ (2—111—6)
- ・余固ト再婚ヲ欲セサリシカ事故アツテ終ニ娶レリ (3—74—6)
- ・何等ノ事故アリテ彼レ僕ヲ見ンヲ欲スルヤ (4—62—4)
- ・今夕止ムヲ得ザルノ事故アリテ頗ル繁忙ナリ (4—73—11)

〔人口〕

- ・希臘ノ古典又ハ羅馬ノ舊事ニシテ已ニ世ノ人口ニ觸レタリ (3—72—11)
- ・山海ノ珍味遠近ノ美酒一ニ人口ニ適セサルナシ (3—85—6)
- ・姓名忽チ人口ニ膾炙シ (3—23—6)

- ・僕不肖ニゾ圖ラズモ姓名ヲ人口ニ膾炙セラレ (4—105—9)
- ・是レ乃チ其書名、人口ニ膾炙シテ遂ニ我邦語ヲ以テ之ヲ翻譯セシムルニ至ル
所以ナリ (5—77—3)

〔當時〕

- ・當時子エブル府下ニ冠タルノ美人ナリ (2—1—12)
- ・當時ノ才子美人盡ク來テ交ラサルナシ (2—21—4)
- ・之レヲフロレンスト呼ビ當時英國第一ノ富貴ナル家ノ女ト云フ (3—95—7)
- ・侯ハ當時ノ才子ナリ (3—121—4)
- ・文人アリ武士アリ政事家アリ讀書家アリ皆ナ當時ニ冠タル者ノミナリ
(3—122—8)
- ・當時有名ノ佳人フロレンス寂然トメ獨坐ス (4—19—10)
- ・外國ニ旅行シ當時不在ナレバマルツラバース受ケテ之ヲ狂瀨院ニ送り
(4—94—3)

〔別業〕

- ・首夏ニ及ンテ盡ク田舎ノ別業ニ行キ以テ暑熱ヲ避ク (3—14—11)
- ・クレーブランドハ田園ノ別業ニ在リ (3—29—6)
- ・クラレンドンハ衆客ヲ野外ノ別業ニ招キ (4—36—10)
- ・クレーブランドニ別レテ告ゲ馬ニ跨テ別業ヲ去ル (4—59—2)
- ・却説マルツラバースハ田園ノ別業ニ移リ (4—83—4)
- ・龍動又ハ田舎ノ別業ニ住メ専ラ心ヲ著書ニ用ヒ (5—42—8)
- ・身ハ田舎ノ別業ニ遁居シテ風月ヲ娛ミ (5—76—4)

⑤現代と字順のちがう漢語

〔聲名〕

- ・唯タ徒ツラニ聲名ヲ貪ルカ如キハ之レヲ倨傲ト稱シ (2—82—3)
- ・終ニ聲名ヲ揚クルニ至ラント (3—114—7)
- ・其聲名近村ヲ傾動ス (4—104—9)
- ・聲名歐洲ニ蕨三オノ兒ト雖氏猶之ヲ知ラザルナキニ至レリ (4—105—6)

- ・有益^{ウ エキ}ノ書^{アラ}ヲ著^セハシ^{セカ}聲[〜]名[〜]籍[〜]々 (5—75—5)

〔斷決〕

- ・一身ノ進退^{オンテツ}ヲ斷決[〜]スル[〜]能[〜]ハサルヲ知ルノミ (2—55—8)

〔忍勘〕

- ・滿面^{ニンカン}赫然タリ然レトモ能ク忍堪[〜]シ (2—129—2)

〔任叙〕

- ・余ヲシテ華族^{タツゾク}ニ任叙^{ニンジヨ}セシメラレンヲ求^{モト}ムルナリ (3—89—12)
- ・華族^{ニンジヨ}ニ任叙[〜]スルヨリ勝^{マサ}ランカ (3—116—6)

(3) 近代語資料の調査

本年度は、東北大学図書館（狩野文庫）の蘭学資料〈医学関係〉と、宮城県立図書館（伊達文庫）の明治期小説類の調査を行なった。なお、東北大学では、佐藤喜代治氏、加藤正信氏、宮城県立図書館では、茂庭邦元氏、小松光三氏、角田主一氏、佐藤宏一氏のお世話になった。

E 今後の予定

来年度は、(1)漢語研究に関する著書・論文目録の作成作業を継続し、(2)『欧州奇事花柳春話』『通俗花柳春話』の点検、疑問カードの処理、一覧表の作成、および、分析に入りたいと考えている。

(飛田)

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A 目 的・意 義

電子計算機を使って、語彙調査・用字調査、あるいは用語索引の作成などを行なおうとすると、言語単位（単語）の認定や活用形の処理・漢字の取り扱いなど、計算機に、ことばや文字を扱わせる上での、さまざまな問題が生じてくる。

現在進行中の語彙調査においては、集計処理・活用形処理は、電子計算機にまかせているが、単位切り、よみがなつけをはじめ、語種・品詞・活用など各種の情報つけは、すべて人手の作業にたよっている。これは、今回の語彙調査に限らず、漢字かなまじりのデータを電子計算機に扱わせていくとすれば、用語索引の作成にしても、機械翻訳や情報検索の場合にしても、こうした作業に、多くの人手と時間をついやしてしまう。しかし、一連の機械処理システムにおいて、システムの各所に人手による作業が介在することは、処理の能率に響くばかりでなく、データの等質性が保ちにくいために、思いがけないミスを生みやすい。

そこで、単位切り・よみがなつけ、および品詞・活用などの情報つけの作業を、大幅に自動化し、入力データの作成から計算機処理までを一貫したシステムにのせる目的で、この研究を進めている。しかし、このような言語的な面の処理を電子計算機にやらせるためには、データの言語的な性格を十分に分析し、一つ一つの処理について最も基本的なところから手順を検討していかなくてはならない。そのため現在進行中の新聞語彙調査の処理結果の分析や処理システムの検討が、重要な課題となる。

なお、この研究の当面の目的は、語彙調査・用字調査の処理システムの向上にあるとしても、その成果は、日本語の言語データの機械処理に理論的根拠を与え、各種の言語情報処理の進展に役立つものとなろう。

B 担 当 者

この研究は、第一資料研究室の田中章夫・江川清・中野洋が担当し、言語計量調査室の石綿敏雄・斎藤秀紀の協力のもとに進められた。また、第一資料研究室の益子芳江・堀江久美子・紺野雅子が、研究作業を助けた。

C これまでの研究経過

電子計算機の導入以来、大量語彙調査の調査方式の検討・調査システムの開発等のほか、つぎの五つの研究課題をとりあげ、その理論的な側面の研究と、実験的なプログラムの作成に当たってきた。

- 1) 言語単位の自動分割
- 2) 漢字データの機械処理法
- 3) 構文解析の自動化
- 4) 活用形の処理方式
- 5) 語彙分類の自動化

このうち(1)の「言語単位の自動分割」は、石綿敏雄・江川清が担当し、その成果は、「電子計算機による言語単位分割自動化の研究(石綿・昭41.1, この題目に科学研究費各個研究の報告書として作成された孔版印刷物)」「漢字かな混り文の自動単位分割に関する一研究(江川・計量国語学43)」に発表した。

(2)の「漢字データの機械処理法」としては、漢字に自動的に「よみがな」をつけていくシステムを作成し、その内容は「漢字の自動解読システム(田中章夫・計量国語学48)」に紹介した。

(3)の「構文解析の自動化」については、石綿敏雄・斎藤秀紀が担当し、「構文解析自動化の研究(国立国語研究所報告35<電子計算機による国語研究Ⅱ>所収)」に、それまでの成果をまとめた。

(4)の「活用形の処理方式」の研究は、江川清が担当し、活用形の終止形変換プログラムを作成した。このプログラムは、新聞語彙調査の処理システムに組みこまれ、すでに実用の段階に達しており、その内容は「活用形処理の

自動化に関する一方式（報告34）」に紹介されている。

(5)の「語彙分類の自動化」については、層別の分類法を扱ったものに、林四郎「新聞語彙調査における層別とその意味（報告34）」があり、語種・品詞・活用および語構成などによる分類法を扱ったものに、中野洋「語彙調査の類別語彙表について（報告34）」がある。

以上のほか、システム設計の基本的な資料を得るために、漢字かなまじり文のエントロピーの計算プログラムを作成し、実験テストを実施した。「漢字かなまじりデータのエントロピー（斎藤秀紀・計量国語学43）」に、そのテスト結果が報告されている。

なお、43年度から、文部省の科学研究費（試験研究）による「言語情報処理における漢字処理の実験的研究（研究代表者・林四郎）」として、「漢字一かな（ローマ字）の相互変換システム」の研究を行ない、漢字かなまじりデータを、全文かな（ローマ字）に変換するシステムを作成した。

D 本年度の研究

前年度までに進行したシステム設計と、理論的側面（アルゴリズム）の研究の上に立って、本年度は、主として、システムの作成と、その実験テストを試みた。

1) 語彙調査データの一貫処理法の研究

この研究は、すでに完成している「単位切りプログラム」「よみがなつけプログラム」「活用形の代表形（終止形）変換プログラム」を、一貫したシステムに組みあげ、さらに「付加情報つけプログラム」を加えて、語彙調査のデータ処理の自動化を目ざすものである。本年度においては、すでに完成している上記の各種プログラムの精度と処理能率の向上をはかるとともに、「付加情報つけプログラム」の開発に当った。

「付加情報つけプログラム」は、データの中の各単語に、位置情報（語構成・複合形式等を示す情報）、語種情報・品詞情報・活用情報を、自動的に与えていくもので、年度内にプログラムの作成を終わり、テスト・ランを実

施した段階である。

2) 漢字かなまじり文のエントロピーの調査

これは、漢字かなまじりデータにおける文字・記号の現われ方を、電子計算機を使って調べるものである。新聞記事20万字分のデータについて、2文字連糸・4文字連糸（String）における文字の連続確率の計算を完了し、調査結果は、すでに各種プログラムの設計において、基本的な資料として活用されている。

3) よみがな方式による、かな（ローマ字）データの漢字変換

全文かな書き、あるいはローマ字書きのデータを、漢字のよみがな単位にサーチにして、自動的に漢字かなまじり文に変換していくシステムの研究である。この方式の利点は、従来、一般に行なわれてきた単語単位の変換方式よりもテーブル（辞書）が小さくてすむうえ、テーブルの更新・さしかえの必要性が、ほとんど起らないなどの利点がある。これは、単語の数は多いが、それに使用される漢字の音訓のパラエティが少ないこと、および、現代において、漢字に新しい音訓が生ずることが、ほとんどないこと等の理由による。

年度内に、システムの設計を完了し、「よみがなテーブル（辞書）」の作成にとりかかったところである。なお、この研究は、文部省の科学研究費（試験研究）による「言語情報処理における漢字処理の実験的研究」の一部である。

E 今後の予定

語彙調査データの一貫処理法の研究については、現在、実験テストを行なっている「付加情報つけプログラム」の完成をめざすとともに、すでに完成している「自動単位切り」「よみがなつけ」「活用形処理」の各プログラムを一貫システムに組みこんでいくのが、当面の仕事である。

エントロピーの研究では、調査を終了した、漢字かなまじり文のエントロピーの計算結果を一部補正して、言語情報処理の関係者に、結果を公表する

予定である。また、この成果の上に立って、かな文字のエントロピーについて調査を開始する予定である。

つぎに、「漢字—かな（ローマ字）」の変換システムについては、さしあたり「よみがな方式による、かな（ローマ字）の漢字変換システム」の作成を進め、将来は、これを、すでに作成済みの「漢字のかな（ローマ字）への変換システム」と組み合わせて、「漢字—かな（ローマ字）相互変換システム」の開発に進む予定である。

（田中）

社会構造と言語の関係についての基礎的研究

A 目 的・意 義

言語あるいは言語生活は、社会生活およびそれを規定している社会構造と密接な関係を持っている。その関係を明らかにするための基礎的準備的研究を行なおうとするものである。

比較的単純な構造を持つと思われる農村について、共通語生活と方言生活との交渉・接触の面を重視しつつ、言語およびその用法（の変動）と社会構造および社会生活（の変動）との関係を明らかにすることを目ざしている。

中心の調査地点としては福島県^{だて}伊達郡保原町地区および福島市郊外^{もにわ}の茂庭地区を選んだ。

B 担 当 者

飯豊毅一（音韻・文法を中心に言語および言語使用の面）、渡辺友左（語彙および社会構造、ならびに両者の関連の面）が担当し、中島美智子が作業を助けた。

C これまでの経過

昭和40年度に始めたこの調査は昭和43年度までに次のようなことを行なった。

- (1) 老年層を対象とする、音韻・文法の方言体系の概略の調査と一部の語彙体系（親族語および形容詞・形容動詞）の調査。これについては「福島北部方言の親族語と形容詞の語彙体系——福島北部調査報告1」（国立国語研究所論集3『ことばの研究』昭和42年3月）や『国立国語研究所年報19』等にその一部を報告した。なお、この地の方言体系の特質を明らかにするために東北地方・関東地方等の各地についても参照調査を行な

った。

- (2) 録音資料による実態調査。話し手の性・年齢・教養等の違いによって使用言語がどのように異なるかを調査するために録音採集を行ない、そのうち8時間分について文字化し、これより採集した約7万枚のカードによって分析を始めた。これは本年度に継続する。その一部については『国立国語研究所年報』17・18・19・20に報告した。
- (3) 社会構造の調査。各種統計表や記録により概観調査を実施した。その一部は『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)——親族語彙と社会構造——』（国立国語研究所報告32）に報告した。
- (4) 社会構造と語彙およびその用法の構造との関連の調査。親族語彙について、それが親族組織およびその社会生活における機能とどのような関係にあるかをみようとした。これについては前記の『国立国語研究所報告32』にその一部を報告した。

D 本年度の作業

1 言語および言語使用の調査

1. 1 録音資料による言語使用の調査

前年度にひき続き、約8時間分の録音資料について、分析を行なった。分析を行なった項目は次の通り。

保原地区4時間分（ほぼ文節相当の単位によるカード枚数 19,042）

- (1) 語中・語尾において、共通語 -t- 音に対応して、どのような音声がいわれているか（-t-か、-d-か）。
- (2) 文末助詞「～ナエ、～ナシ、～ナン」等がどのように用いられているか。文末尊敬表現法がどのようなものであるか。

茂庭地区4時間分（ほぼ文節相当の単位によるカード枚数 18,010）

- (1) 共通語の /so/ に対応して、どのような音声がいわれているか（指示詞等の場合、たとえば [sore] [hore] 〈それ〉はどのように用いられているか）。

(2) 共通語の「～するが」「～するけれども」などに対応する逆接の条件を表わす言い方が、どのように用いられているか。

(3) 主格・所有格を表わす場合にどのような形式が用いられているか。

1. 2 言語使用の意識に関する面接調査（場面調査を含む）

福島県北部地域（保原町地区・茂庭地区）の人々の言語使用の意識について、昭和45年2月28日より3月30日にかけて、面接調査を行なった。

被調査者約220人。主として老年層（60歳以上）、壮年層（40歳代）、青年層（20歳代）の間にどのような違いがあるか、男性・女性の間にどのような違いがあるか、音声・音韻や語彙や文法等のどのような分野にどのような違いがあるかを調査しようとしたものである。この調査の企画・立案等はすべて飯豊が担当したが、具体的な調査実施においては室員渡辺友左のほか菅野宏氏（福島大学教授）、渡辺義夫氏（福島大学講師）、大橋勝男氏（新潟大学助手）、中松竹雄氏（東京教育大学大学院生）、竹野克雄氏（福島大学生）の協力を得た。

調査項目の主なものは次の通り。音声・音韻関係としては、

- (1) /i/と/e/ 息, 駅, 百円, インキ, 言われない
- (2) /ε/ 蠅, 摒, 聞かない, 深い, 短い
- (3) /je/ 襟, 縁側
- (4) /ju/ 雪, 言われない
- (5) /ki/ 金庫, 狐, 聞かない, きかない
- (6) /-ki/ インキ, 息, 駅, 雪, 桑の木
- (7) /kju/ 急行
- (8) /-kjo/ 農協
- (9) /-k-/ 聞かない, きかない, 深い, 短い, すじこ, 急行, 重箱, 百円
- (10) /si/と/su/と/sju/ 梨, 下, 鹿, すし, 茄子, 手術, すじこ
- (11) /ci/と/cu/と/cju/ 地図, 注射
- (12) /-ci/と/-cu/と/-cju/ 焼酎, 狐, 手術

- (13) /zi/と/zu/と/zju/ 字, 重箱
- (14) /-zi/と/-zu/と/-zju/ 手術, 地図, 短い, すじこ
- (15) /-t-/ 的
- (16) /-d-/ 窓
- (17) /kwa/ 桑の木
- (18) /sja/ 注射, 写真機
- (19) /sjo/ 焼酎
- (20) /hja/ 百円
- (21) /-r-/ 白粉, 柱, 叱られた, 言われない
- (22) 無声化 聞かない, きかない, 深い, 短い, すじこ

語彙関係としては

- (1) バッタラ (解) (2) ふりうち棒 (解) (3) 乗合馬車 (解) (4) 牡牛 (解)
- (5) 嬰兒箆 (解) (6) 摺臼 (解) (7) 自在鍵 (8) 足半ぞうり (解) (9) 鼻どり (解)
- (10) 横座 (解) (11) 耕す (深く) (12) 耕す (浅く) (13) 降りる
- (14) 走る (15) 汽車が走る (16) 午後間食 (17) 奥山 (18) 入口の山 (19) たいくつして手持ぶさた (解)
- (20) 疲れているさま (21) 水の入口 (22) 水の出口
- (23) あらくれ (24) 畝道 (25) 写真機 (26) ねじまわし (27) 日射病 (28) 予定する
- (29) 恥ずかしい (30) おばあさん (31) お父さん (32) お母さん (33) 赤ん坊 (34) 額 (解)
- (35) かまきり (36) とんぼ (37) 赤とんぼ (38) 竹馬 (39) おはじき (40) 片足飛
- (41) 「デッケー」と「ズねー」の意味 [注, (解) とあるものについては理解語としても調査した。]

文法関係としては

- (1) 推量, あの人**は**さそ**った**ら**行**く**だ**ら**う**か, どこに**行**く**ん**だら**う**, その山とあの山と**ど**っちが**高**い**だ**ら**う**か, きみは**去**年**行**っ**た**ら**う**, うちの子**ど**もは百姓に**な**ら**う**と商人に**な**ら**う**と自由**に**さ**せ**る**つ**も**り**だ
- (2) 打消推量, あ**ん**な**と**ころ**に**は**も**う**行**く**ま**い**と**思**っ**た
- (3) 仮定条件, だ**れ**も**書**か**な**い**ん**ら お**れ**が**書**く**し**か**な**い**な**あ, **書**き**た**く**な**

ければ書かなくてもいいよ

(4)確定条件, 近いうち東京へ行かなければならぬ, あの人が来ないので
仕事が出来なかった

(5)逆接条件, 高いのは高いけれども 木が生えていないからだめだ

(6)使役, うちのこどもにも高校の試験を受けさせましたよ

(7)可能, そんな小さな筆では大きな字は書くことができない, きれいな字
なんて おれには書くことができないよ, 福島へなら今からでも行って来
られるだろう

(8)「買う」+「べー」の形, 京都に行ったら何を買おうかなあ

(9)「来る」の命令形, 何をぐずぐずしているんだ はやくこっちへ来い

(10)過去の経験, おれも行ったことがある

(11)回想, 伝聞など, あの人はすもうが強かったっけなあ, きう大きな荷
物を持って歩いて行くふうだったなあ, あの人も行ったんだそうだ

(12)敬語表現, そうですね お父さん, はい そうでございます (恩師),
お父さん これを書いて下さい, お早うございます, こんばんわ, いい天
気ですね (恩師), さあ どうぞお上り下さい, おもしろいものをごらん
に入れますよ, あなたがお書きになったのですか, 先生は何時の汽車にお
乗りになりますか (恩師)

(13)二格へ格, 東京へ行く, 映画を見に行く, ここは福島へ行くのに〔は〕
便利になりましたね

(14)ヲ格, うちのこどもをばかにしていじめた, はさみを取ってくれ

(15)並列格, 50円のと 100円のとを買ってきた

(16)所有格, それは先生の帽子だ, これはだれの帽子かね, おれさえできな
いのお前にできるもんか

(17)その他, そのためにみんながひどい目にあった, これはおれの機械だ,

おれたちが買ったものだ

2 社会構造と語彙およびその用法との関連について

2.1 親族組織の構造と親族語の意味用法との関連

この課題についてこれまで調査研究してきたことをまとめて、中間報告書『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)——マキ・マケと親族呼称——』を刊行した。この報告書には、次の二つの調査報告をのせてある。

① 「俚言としてのマキ・マケと学術用語としてのマキ・マケ」

② 「日本人の親族呼称についての事例研究(1)」

2.2 性向についての価値観と性向語彙の意味用法の構造との関連

人間の性向のありかたについて社会が伝統的にもっている価値観、つまり社会がその社会の構成員に対してもっている「期待する人間像」（裏を返せば「期待しない人間像」）がどのようなものであったかを明らかにし、あわせて、それとの関連において性向語彙という語彙の一分野（の意味用法）が伝統的にどのような構造をもってきているかを明らかにする。

さしあたって今年度は、人間の性向の中でも、セックスと言語活動の二つの小項目に関係したものをとりあげ、それと性向語彙の意味用法の構造とがどのようにかかわり合っているかを明らかにしようとした。そのため、まず手はじめに、日本大学・東京外国語大学・共立女子大学・東京都立大学の学生429名（男子223名・女子206名）に対して質問紙法による意識調査を実施した。調査は、次年度も継続して実施する。

E 今後の予定

- (1) 言語および言語使用の面においては、さらに場面により使用語がどのように異なっているか等についてさらに詳しく調査を進める予定である。
- (2) また、社会構造と語彙およびその用法との関連についても、通信調査をも含めつつ、さらに各方面から調査を進め、両者の関係を追究しようとしている。

（飯豊）

現代語の表記法に関する研究

——送りがな・漢字——

A 目 的・意 義

国語の正書法を確立するうえに役立つ基礎資料を得るために、国語の文字・表記法に関する諸問題を調査・研究する。

B 担 当 者

調査研究の担当者は、林四郎・土屋信一・野村雅昭の三名であり、小幡利子（44. 12. 31退職）が作業を助けた。

C これまでの経過

国語の文字表記についての諸問題を明らかにするために、これまで二つの方向から調査研究を進めている。一つは文字活動をいとなむ読み手および書き手を対象とした、表記行動に関する調査研究であり、いま一つは、書かれた文字資料を対象とした文字表記の調査研究である。

前者として40年度から、「文字使用の実態調査」を採り上げ、後者として42年度から、「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」を採り上げ、調査研究を進めてきた。

「文字使用の実態調査」は、文字活動をいとなむ読み手および書き手を対象として、その表記の実態や、文字・表記に対する意識・態度を調査することを意図している。40・41年度に送りがな・かな書きの問題を中心に準備的調査を実施し、調査項目・質問形式・分析方法等につき検討した。その結果、調査の内容を送りがな表記に限り、対象を中学生・高校生・大学生、およびふだん文字に接する機会の多い社会人合わせて約3,000人として、42年2月から9月にかけて本調査を実施した。引き続き電子計算機を使って集計作業を進め、43年度末までに、集計作業のほとんど全部と、かなりの部分の

分析を行ない、報告書の原稿としてまとめた。（『年報』18・19・20参照）

「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」は、第一資料研究室と言語計量調査室で実施している、電子計算機による新聞の語彙調査にともない、漢字および表記の研究を行なうものである。語彙調査によって作成されたデータ（磁気テープ）に、さらに機械処理を加え、アウトプットされたデータに人手による処理を施し、各種漢字表、語表記表を作成する。そして、その分析・記述を行なうというのが、そのあらましである。

42年度には、電子計算機による処理方法の研究、ならびに、長単位データによる、漢字調査の機械処理システムの設計およびプログラムの作成を行なった。そして、43年度には、1紙1年分長単位データの機械処理を行い、1紙朝刊前半分用語例表の作成にとりかかった。

D 本年度の作業

I 文字使用の実態調査（継続）

集計作業は前年度までにほとんど終了しており、本年度は、新聞を読む時間その他文字活動にかかわる質問事項と送りがな表記との関係について、残っているものを集計した程度である。また、分析は、次のものを行なった。

- (1) 個々の語の送りがな表記の分析（経験年数別など）
- (2) 名詞と動詞との相関・単純語と複合語との相関
- (3) 同類の語の相関関係（類推作用の程度に関する分析も含む。）

このうち、(1)については、前年度行なった分析をさらに綿密に行なったものである。

分析は年度末に終了し、その結果は記述され、報告書の原稿としてまとめられた。この調査研究は本年度で実質的には終了した。

II 新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究（継続）

本年度は、昨年度に引き続いて、漢字に関する調査研究を行なった。

- (1) 1紙1年分層別漢字度数表の作成（完了）

1紙1年分度数台帳にもとづき、話題別の層別区分による、度数一覧表

(部首順・五十音順・度数順)を作成した。なお、下に、1紙1年分の出
現漢字を、当用漢字表をもとに分類したものをあげておく。

1紙1年分出現漢字の内訳

	ことなり字数	のべ字数	のべ%
当用漢字	1,827	615,029	97.6
教育漢字	881	543,054	86.1
{ 準教育漢字	115	18,137	2.9
{ 非教育漢字	812	53,447	8.5
○補正漢字	19	391	0.1
表外字	1,056	15,284	2.4
{ ⊕補正漢字	29	985	0.2
{ 人名用漢字	80	4,401	0.7
その他	947	9,898	1.5
計	2,883	630,313	100.0

〔当用漢字で1回もあらわれなかった字〕

韻・莖・儉・侯・搾・勺・詔・薪・錘・塑・嫡・痘・匆・畝・効・嚇・
且・璽・遵・脹・朕・罷・濫(23字)

(注) ○準教育漢字とは、昭和43年7月11日に告示された新学習指導要領で、小学
校での学習が認められたもののことである。

○補正案で加えられるものの中には、人名用漢字と重複する「尚・杉・斉・
竜」の4字と、字体の変更による「灯」が含まれている。

○1回もあらわれなかった字のなかで、肩に*のしるしがあるものは、当用
漢字補正案で削られる予定のものである。

(2) 1紙朝刊前半分長単位用語例表の作成(継続)

昨年度に引き続いて、朝日新聞朝刊(1月～6月)の用語例表にもとづ
き、音訓・用法別の漢字表の作成を行なった。これは、45年度前半に完成
するみこみである。具体的な作業は、以下のとおりである。

(i) 用語例台帳からカードへの転記

(ii) 同表記異語の判別

例：一月（いちがつ・ひとつき），通った（とおる・かよう）

(iii) 単位分割

○人名・地名・社名を含むもの

例：佐藤／首相，東京／都／知事，三井／不動産／株式会社

○サ変動詞・形容動詞の活用語尾を含むもの

例：発表／する，旅行／し，元気／な，静か／に

(iv) 活用語処理

例：読ま→読む，立て→立つ・立てる，打ち上げ→打ち上げ（名）・打ち上げる

(v) カードの分類・配列

見出し漢字を五十音順に配列し，それぞれの漢字の用語例を，音に用いられたもの，訓に用いられたもの，人名・地名に用いられたものの順に分類した。そして，さらに，それぞれの用語例を五十音順に配列した。

(3) 新聞使用漢字の分析

本年度は，漢字の基本度についての方法論的な実験と音訓使用状況についての試験的な分析を行なった。詳しくは，下記の論文を参照されたい。

○野村雅昭「用語用字調査における用語と用字の関係についての実験（その1）」（『国研LDP』4号）

○同「新聞使用漢字の性格一音訓度を中心として一」（『国研LDP』5号）

D 今後の予定

(1) 文字使用の実態調査

分析および調査の結果は，研究報告『送りがな表記の実態』（仮題）として，45年度前半に刊行する予定である。

(2) 新聞の漢字および表記の研究

45年度には，中間報告として，1紙1年分層別漢字度数表と1紙朝刊前半分用語例つき漢字表を刊行する。また，残りの2紙2年分について

の機械処理および人手による作業にとりかかる予定である。

(林)

電子計算機による語彙調査

——新聞を資料とする——

A 目 的

婦人雑誌，総合雑誌，雑誌九十種と続けてきた現代語の用語の実態調査を，カードによる人為作業から電子計算機による自動処理に移して，データの処理量をふやし，語彙調査の結果を今日的課題の解決に役立つようにすることを目的とする。

B 担 当 者

言語計量調査室の石綿敏雄，斎藤秀紀，木村繁（44. 5. 1 退職）および第一資料研究室の田中章夫，南不二男（43. 2. 28 海外出張），江川清，中野洋がこれに当たり，言語計量調査室の花井夕起子，篠田美代子（44. 6. 30 退職），小高京子，田中由紀子（45. 3. 31 退職），沢村都喜江（44. 4. 1 採用），下山いくよ（44. 7. 1 採用），第一資料研究室の益子芳江，堀江久美子，紺野雅子が研究作業を助けた。計算機の保守のかたわらプログラムの作成に日立電子サービスの田口昇氏の協力があつた。

C これまでの経過

昭和41年1月から12月までの新聞三紙（朝日・毎日・読売）一年分を対象とする語彙調査は，昭和41年から作業にとりかかり，42年末までは，サンプリング作業，計算機にかけるための前処理作業および長単位処理プログラムの作成はほぼ完了し，1紙朝刊半年分について，テスト・ランを実施した。漢字テレタイプによる原データのさん孔作業と，それを入力して長単位関係各種ファイル（磁気テープ）を作成するオペレートとは，昭和42年度末までに，全体の3分の1に当たる1紙1年分について終了した。昭和43年度には，短単位処理のプログラムの設計にとりかかり，長単位1紙1年分の機械

処理を行なった。

D 本年度の研究作業

本年度の研究作業の主なものは次のとおりである。

1. 短単位の機械処理。

長単位処理（年報18, 19, 20参照）に引きついで、その結果に人為作業を施し、これを短単位機械処理のためのインプットとする。機械処理の過程は別図に示したとおりである。今年度は1紙1年分（94万単位）について処理を開始し、これを完了した。この結果は次に述べる報告にのせた。

2. 報告書（中間処理）の作成。

前年に機械処理を終わった長単位表と本年度に処理した短単位表を調査の中間報告として刊行すべく、製表、原稿の作成を行ない、印刷にともなう校正作業を行ない、刊行した（報告37）。その内容は大略次のとおりである。

調査の概要の説明

報告書に収めた表の説明

五十音順短単位表（使用度数5以上の語13206語の表）

度数順短単位表（語数同上）

簡易五十音順長単位表（使用度数6以上の語11044語の表）

度数順層別長単位表（語数同前、層は話題別）

長単位層内順位表

3. 長単位データのさん孔

本年度も引き続き原入力データのさん孔作業を行ない、本年度までで全体のほぼ3分の2に当たる、朝刊2紙1年分、夕刊2紙1年分の第一次さん孔を終了した。

4. 長単位処理プログラムの作成。

本年度内に長単位処理プログラム作成者の一人が他に転勤したため、プログラムの運営上困難な問題が生じた。これを補うために、その部分を作成し直した。その内容も別に図示する。転勤者があるために計算機のオペレーシ

ョンに支障を来たすことがあるのは一般の官庁会社等でもよく聞かれる例であるが、その対策の一つとしてプログラムをコンパイラ言語で書くように、最近ではなっている。この処理システムでもそのことを考えて、この部分をCOBOL言語で試作してみた。

5. 類別語彙表の作成

用語の調査に電子計算機を利用する場合の便利な点として、同一のインプットから、多くの種類のアウトプットが得られるようになることを、数えることができる。語彙表に添えた語彙論・文法論的な情報を利用して、類別語彙表を作成するプログラムを作り、これによって各種の語彙表を作成した。本年度のアウトプットは

外来語

形容詞

動詞

助詞

助動詞

接辞

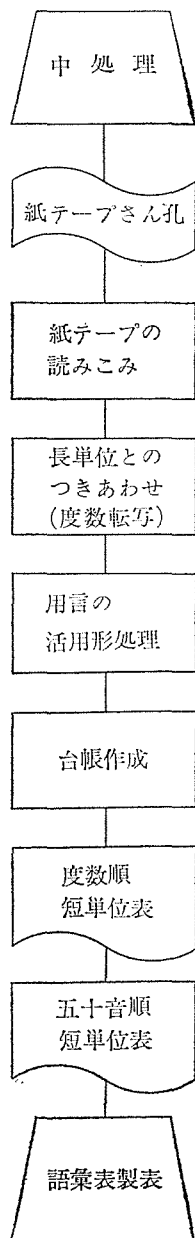
などである。

E 今後の予定

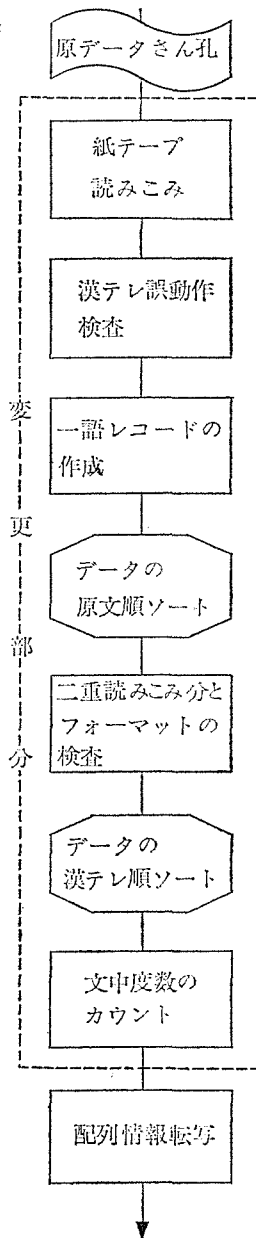
45年度では長単位機械処理をほぼ完了せしめて、これについて中処理の過半を終了し、46年度に語彙表作成の全体作業を完了せしめる予定である。44年度に作成した類別語彙表に、さらに他の類別語彙表をアウトプットし、報告書として刊行する。

(石綿)

短単位機械処理
ブロックチャート
(詳細は国語研報
告34の24ページ
参照)



長単位機械処
理の一部変更



国語および国語問題に関する情報の収集・整理

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和44年1月から12月までの刊行の図書・雑誌・新聞について文献調査を行なった。これらの文献目録は、その他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和45年版）に掲載されている。

以下、そのおのおのについて分類し、冊数および点数により、大まかな傾向を示すことにする。（ ）内に前年の数を示し、今年のものと比較できるようにした。

この調査および国語年鑑に関する作業は、次のものが担当した。

田原圭子 伊藤菊子 中曽根仁

I 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては、「納本週報」（国立国会図書館）、その他の目録から情報を補い、総数430冊の分類目録を作成した。

刊行書の分類と、その冊数

国語（学）		語彙・用語	13（7）
国語一般	21（15）	人名・地名	3（6）
国語史	16（23）	文法	5（7）
音声・音韻	6（2）	文章・文体	8（6）
文字・表記	11（6）	方言・民俗	56（43）
語彙・用語		コミュニケーション	

コミュニケーション一般	1 (15)	辞典・用語集	
言語技術(話し方・書き方)	21 (30)	国語辞典	5 (7)
情報処理	4 (5)	用語辞典・用語集	9 (17)
マス・コミュニケーション	3 (8)	特殊辞典	10 (15)
国語国字問題	3 (3)	索引	9 (11)
国語教育		資料	
国語教育一般	9 (6)	資料	18 (22)
学習指導一般	23 (22)	史料	2 (11)
語彙・文字教育	18 (7)	解題・目録	11 (12)
文法教育	0 (1)	年鑑	14 (13)
聞く・話す	0 (1)	計	379 (403) 冊
読む・読書指導	12 (21)	追補	
書く・作文指導	14 (15)	国語学その他	8 (10)
文学教育	4 (2)	語彙・文法	4 (0)
幼児教育	2 (0)	方言	9 (19)
特殊教育	2 (4)	コミュニケーション	9 (5)
学力調査	1 (1)	国語教育	4 (1)
国語教科書・その他	3 (5)	言語学その他	11 (3)
日本語の研究と教育	10 (10)	辞典・索引・資料	6 (9)
言語学その他	32 (24)	総計	430 (450) 冊

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・発行年月・巻号数およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。当研究所で入手できなかったものについては，「雑誌記事索引」（国立

国会図書館)、「LLBA」(Language and language behavior abstracts)，その他の目録類からできる限り情報を補った。採録した論文・記事の総数は、2,238 点に達した(連載物などについては、毎回ごとに 1 点と数えることはせず、その題目について 1 点と数えた)。

1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数(目録類から採録した分は含ない)

a 一般刊行雑誌(学会誌も含む)……267(266)種

国語・国文・言語ほか	112(115)	過刊誌	1(1)
方言・民俗	13(8)	文芸・詩歌・芸能	6(7)
国語問題	3(4)	その他(教育・社会学・	
国語教育	21(24)	心理学ほか)	73(69)
マス・コミ関係	15(15)	本年度臨時にはいった雑誌	
外国語	12(10)		11(13)

b 大学・研究所等の紀要・報告類……202(209)種

2 論文・記事の分類とその点数

国語(学)	86(145)	語彙・用語	
国語史		語彙・用語一般	21(37)
国語史一般	48(33)	古語	46(58)
訓点資料関係	13(17)	現代語	27(40)
音声・音韻		新語・流行語	11(2)
音声・音韻一般	29(25)	外来語	1(4)
史的研究	14(17)	名づけ(人名・地名)	8(8)
アクセント・イントネーション	14(5)	辞書・索引	20(7)
文字・表記		文法	
文字・字体	30(13)	文法上の諸問題(現代語法)	159(59)
表記	48(31)	史的研究	72(45)
		敬語法	13(31)

文章・文体

文章・表現一般	144 (71)
史的研究	65 (74)

古典の注釈

古典注釈一般	4 (0)
上 古	9 (8)
中 古	17 (20)
中 世	8 (8)
近世以降	9 (15)

方言・民俗

方言一般	33 (38)
各地の方言	
東 部	27 (26)
西 部	19 (18)
九州・沖縄	17 (13)
民 俗	6 (3)

コミュニケーション

コミュニケーション一般	11 (13)
言語生活	25 (29)
言語活動	
言語活動一般	7 (12)
書く・読む	34 (61)
話す・聞く	6 (37)
情報処理	27 (35)

マス・コミュニケーション

一般的問題	14 (3)
-------	--------

新 聞	4 (1)
放 送	16 (12)
広告・宣伝	3 (3)
印刷・出版	5 (8)

国語問題

国語問題一般	42 (39)
表記法	11 (13)
当用漢字など	4 (13)

国語教育

国語教育一般	52 (48)
言語能力の発達	9 (7)
国語教育史	11 (24)
学習指導一般	70 (128)
ことばの教育一般	13 (22)
文字・表記教育	15 (31)
語彙教育	1 (21)
文法教育	71 (50)
聞く・話す	3 (31)
読む・書く	
読む・書く一般	30 (27)
読解指導	34 (57)
読書指導	15 (13)
作文教育	80 (79)
文学教育	23 (13)
古典教育	5 (14)
漢文教育	4 (2)
特殊教育	8 (11)
学力調査	7 (4)

国語教科書・教材研究	32 (45)	文章・文体	17 (11)
日本語の研究と教育	20 (22)	方言・民俗	6 (3)
言語学		国語問題	1 (0)
言語一般	63 (120)	国語教育	9 (14)
意味	11 (30)	日本語の研究と教育	7 (0)
比較研究	7 (22)	言語(学)その他	15 (17)
翻訳の問題	7 (15)	計	2,049 (2,274)点
外国語研究	10 (31)	追補	
外国語教育(学習)	27 (59)	国語(学)その他	34 (12)
各国の言語問題	13 (17)	音声・音韻	11 (16)
資料		文字・表記	9 (5)
資料一般	2 (0)	語彙	18 (50)
国語資料	14 (14)	文法	10 (22)
翻刻	14 (20)	文体	10 (6)
目録	4 (4)	方言	17 (12)
時評・随筆	52 (46)	国語問題	6 (3)
書評・紹介		国語教育	20 (25)
国語(学)その他	26 (24)	日本語の研究と教育	7 (14)
語彙・文法	13 (16)	言語(学)その他	47 (30)
辞書・索引	1 (12)	総計	2,238 (2,469)点

Ⅲ 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き総数は2,468点で、その内訳は次のとおりである。

1 新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙		西日本	473(128)
朝日	570(253)	中部日本 ^{*2}	49(0)
(大阪) ^{*1}	(15)(11)	週刊・その他	
毎日	198(154)	日本読書新聞	14(12)
読売	274(192)	週刊読書人	51(35)
(大阪)	(6)(10)	図書新聞	28(31)
東京	245(154)	新聞協会報	21(26)
産経	111(91)	教育芸術新聞	5(11)
(大阪)	(1)(0)	その他	33(55)
日本経済	126(77)	計	2,468(1,338)点
北海道	68(97)		

*1 (大阪) は、各紙の大阪版であって、山田房一氏から、関係記事のあるごとに送られたものである。

*2 中部日本新聞は、見坊豪紀氏から寄贈された「日本語を考える」の特集のコピーである。

2 月別の切り抜き点数

1月 189(87)	2月 196(87)	3月 206(109)
4月 226(132)	5月 233(112)	6月 226(118)
7月 170(104)	8月 186(110)	9月 206(89)
10月 227(130)	11月 206(136)	12月 197(124)

3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	158(128)	語彙一般	452(50)
音声・音韻	19(9)	各種用語	23(1)
文 字		新語・流行語・隠語	52(34)
文字・表記	11(2)	外国語・外来語	43(49)
活字	1(1)	辞書	31(23)
語 彙		問題語・命名	60(64)
		人名・地名	320(18)

文 法	16 (2)	かな書き	11 (7)
文 体		横書き・縦書き	2 (1)
文体・表現	22 (24)	人名・地名の表記	3 (14)
方 言		外来語表記	9 (1)
方言一般	27 (16)	ローマ字	1 (2)
方言と標準語	6 (6)	国 語 教 育	
各地の方言	372 (92)	国語教育一般	16 (33)
言 語 生 活		学習指導の問題	
言語生活一般	49 (47)	学習指導一般	4 (19)
ことばの問題	22 (14)	話す(聞く)	4 (5)
ことばづかいの問題	16 (32)	読む(読書指導)	19 (10)
敬語の問題	29 (9)	書く(作文指導)	9 (10)
言 語 活 動		文学・古典教育	3 (9)
言語活動一般	7 (5)	特殊教育	15 (15)
話すこと(聞くこと)	25 (29)	視聴覚教育	0 (0)
書くこと(読むこと)	13 (19)	ローマ字教育	1 (0)
読 書	14 (11)	学力テスト	0 (3)
ことばと機械	26 (42)	幼児語教育	14 (15)
国 語 問 題		言 語 学	
国語問題一般	41 (57)	言語一般	49 (40)
表記の問題		外国語一般	7 (16)
表記一般	18 (16)	比較研究	9 (4)
当用漢字など	106 (61)	翻訳の問題	27 (35)
かなづかい	2 (3)	外国語教育	32 (30)
送りかな	3 (2)	外国語に関する紹介ほか	18 (5)
		日本語の研究と教育	30 (35)
		マス・コミュニケーション	

マス・コミ一般	21 (15)	出 版	38 (10)
新 聞	10 (4)	書評・紹介 ほか	77 (99)
放 送	43 (13)		
宣伝・広告	13 (12)	計	2,468 (1,338)点

上記のごとく、切り抜き点数は昨年よりも千百点あまり多かった。これは、朝日・読売・東京夕刊・西日本夕刊などの各紙に連載記事があったことによる（くわしくは、「国語年鑑、45年版」に掲載）。分類別の点数で、語彙一般・地名・各地の方言・当用漢字などの項目の点数が、例年に比して著しく多いのもそのためである。また、出版に関しての記事が多かったが、これは、日本出版学会の発足や、ブッククラブの誕生など、出版界に新しい動きがあり、それらに関する記事が各紙に掲載されたことによる。

〔付〕所外からの質問について

昭和44年度に電話で受けた質問件数を月別に示すと次のとおりである。

計	44年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	45年 1月	2月	3月
816	79	57	77	60	71	77	75	69	60	57	73	61

質問の内容は例年どおり、多方面にわたっていた。用字用語について件数が多いのも例年どおりで、171件あり、そのうち52件は同音類義語に関してだった。そのなかでも、今年度は「代・換・替・変」「異状・異常」の使いわけについての質問が多かった。そのほか、漢字の読みに関して93件、字体に関して54件、かなづかい41件、送りがな39件など。また、語の意味、敬語の使いかた、当用漢字、文法、ことわざの出典について、研究所および研究所の刊行物についての照会なども、例年のとおり質問の多いものだった。電話の質問のほかには、はがき・封書による質問が16通、直接研究所に来所され質問した人が15人ほどあった。

以上の質問件数は、すべて質問の係を通ったもので、所員が直接個人的に受けた質問は含んでいない。

（田原，中曽根）

図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和44年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は、次のとおりである。

図 書

受 入……………2,200冊

	購 入	寄 贈	製本雑誌	その他	計
和書	1,409	211	307	82	2,009
洋書	92	44	54	1	191
計	1,501	255	361	83	2,200

逐次刊行物（学術雑誌，紀要，年報類）

継続受入……………500種

	購 入	寄 贈	計
和	57 *	405	462
洋	23	15	38
計	80	420	500

* 新聞（8種）を含む。

（大塚）

庶務報告

I 庁舎および経費

1 庁舎

所 在 東京都北区稲付西山町

敷 地 10,030m²

建 物

本 館 鉄筋コンクリート二階建 (延) 1,576m²

図書館 鉄筋コンクリート平家建書庫積層(3) (延) 213m²

電子計算機室 鉄筋コンクリート平家建 118m²

その他付属建物 (延) 1,534m²

計 3,441m²

2 経 費

昭和44年度予算総額 157,684,000円

人 件 費 85,086,000円

事 業 費 70,228,000円

各 所 修 繕 2,370,000円

昭和44年度文部省科学研究費補助金総額 4,560,000円

一般研究 (B) 3,200,000円

〃 (C) 270,000円

〃 (D) 150,000円

試 験 研 究 940,000円

II 評 議 員 会 (昭和45年3月31日現在)

会 長 久松 潜一 副会長 有光 次郎

(45.1.13 会長就任) (44.7.9 副会長就任)

阿部 吉雄	石井 良助	江尻 進
* 遠藤 嘉基	尾高 邦雄	高津 春繁
佐伯 梅友	佐々木八郎	沢田 慶輔
* 千葉雄次郎	永井 健三	中村 光夫
西尾 実	西脇順三郎	前田 義徳
松方 三郎	山本 有三	渡辺 茂

*印は44. 12. 15 新任。

中島文雄・武藤俊之助両評議員は44. 12. 14 離任。

III 組織と職員

1 定員

教官 35 事務官 15 その他 24 計 74

2 組織および職員（昭和45年3月31日現在）

	職 名	氏 名	備 考
国立国語研究所	所 長	岩淵悦太郎	
第一研究部	部 長	野元 菊雄	44.2.27～45.3.8 外国出張 (ブラジル)
話しことば研究室	室 長	上村 幸雄	
		中村 明	
		高田 正治	
		衛藤 蓉子	
書きことば研究室	室 長	西尾 寅弥	
		宮島 達夫	
		高木 翠	
		田原 圭子	
地方言語研究室	室 長	徳川 宗賢	
		本堂 寛	
		佐藤 亮一	
		高田 誠	
		白沢 宏枝	

	職 名	氏 名	備 考
		中野 文子	(旧姓山本)
	非 常 勤	W. A. グローターズ	
第二研究部	部 長	興水 実	45. 3. 31 退職
国語教育研究室	室 長	芦沢 節	
		村石 昭三	
		根本今朝男	
		天野 清	
		川又瑠璃子	
		福田 昭子	
		小林 信子	
言語効果研究室	室 長	高橋 太郎	
		大久保 愛	
		鈴木美都代	
第三研究部	部 長	斎賀 秀夫	44. 2. 27～45. 3. 8 第一研究部長
近代語研究室	室 長	飛田 良文	事務代理
		松井 利彦	
		牧野 正子	
		中曽根 仁	
第四研究部	部 長	林 四郎	
第一資料研究室	室 長	田中 章夫	
		南 不二男	43. 2. 28～45. 5. 31(予定) 外国出張 (オーストラリア・ニュージーランド)
		江川 清	
		中野 洋	
		益子 芳江	
		堀江久美子	
		紺野 雅子	44. 4. 1 採用
第二資料研究室	室 長	飯豊 毅一	
		渡辺 友左	
		中島美智子	

	職 名	氏 名	備 考
第三資料研究室	室長(併)	伊藤 菊子	
		林 四郎	44. 4. 1 第三資料研究室長に併任
		土屋 信一	
		野村 雅昭	
言語計量調査室	室 長	小幡 利子	44. 12. 31 退職
		石綿 敏雄	44. 4. 1 第三資料研究室長から配置換え
		斎藤 秀紀	
		木村 繁	44. 4. 30 退職
		篠田美代子	44. 6. 30 退職
		花井夕起子	44. 4. 1 第一資料研究室から配置換え
		小高 京子	
		田中由紀子	45. 3. 31 退職
		沢村都喜江	44. 4. 1 採用
		下山いくよ	44. 7. 1 採用
庶 務 部	部 長	的場 益雄	
		鈴木 元彦	
庶 務 課	課長補佐	伊藤 伸二	
		西山 博	
		岡本 まち	
		根岸佐代子	
		田島 正幸	
		根岸 達躬	44. 4. 1 東京外国語大学会計課長から配置換え
会 計 課	課 長	三浦 清伍	44. 4. 1 金沢大学経理課長に昇任
		渋谷 正則	44. 4. 16 会計課課長補佐に昇任
		鈴木 亨	
		筒井 士郎	
		金田 とよ	
		加藤 雅子	

図 書 館	職 名	氏 名	備 考
		中村 佐仲	
		船倉 正章	
		安藤信太郎	
		木村 権治	
		岩田 茂男	
	館 長	(欠)	
		大塚 通子	
		大浪由紀夫	

IV 外国人研究員および内地留学生の受け入れ

1. 外国人研究員

氏名・職名	研究題目	研究期間
ヴィエスラフ・コタンスキー ポーランド国ワルシャワ 大学教授	日本語と外国語の対照 研究	昭和44.6.10から 9.10まで
イルジー・ネウストウプニ オーストラリア国モナシ ュ大学教授	日本語を中心とする日 本文化の国際的理解	昭和44.1.10から 5.31まで

2. 内地留学生

氏 名	勤務・職名	研究題目	研究期間
武田 治郎	東京都立四谷商業高 等学校教諭	構想力を培う作文教 育の基礎として	昭和44.4.1 から 45.3.31まで
伊藤勢津子	富山県中新川郡上市 町立白萩南部小学校 教諭	国語科における基礎 的な指導過程につい て	昭和44.6.16から 6.29まで
小島 幸枝	東海学園女子短期大 学国文科講師	語彙の機械処理にお けるデータの取扱い について	昭和44.7.1 から 8.31まで
大久保団治	茨城県水海道市立水 海道小学校教諭	書く力を伸ばす学習 指導（特に書くこと の指導事項を中心と して）	昭和44.10.1から 12.24まで

高木	宏	山口県防府市立華浦 小学校教諭	読解と読書と表現の 関連について	昭和44. 11. 6 から 12. 5 まで
----	---	--------------------	---------------------	----------------------------

V 日 記 抄

1969. 4. 17 東京教育大学教育学部人文科倉沢研究室柏村 茂氏ほか 3 名研究所
見学
6. 3 文化庁附属機関庶務・会計部課長会議（国立教育会館）
6. 12～13 第28回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（私学会館）
6. 13 文部省所轄研究所長会議（石膏会館）
6. 18 第20回文部省所轄機関事務協議会（東京国立博物館）
7. 9 第70回国立国語研究所評議員会
議事
1. 副会長の選出について
 2. 地方研究員について
 3. 昭和45年度概算要求の事項について
 4. その他
7. 9 国際基督教大学高橋たね氏ほか10名研究所見学
7. 11 東京教育大学附属小学校教員藤井氏ほか 7 名研究所見学
7. 30 埼玉県立川越女子高等学校教諭島田洋一氏ほか生徒 8 名研究所見学
8. 6 ラジオ関東アナウンサー 3 名研究所見学
8. 11 長崎市立淵中学校教諭田中修一氏研究所見学
8. 16 岐阜市立岩野田中学校教諭玉井武博氏ほか 1 名研究所見学
9. 4 アメリカ合衆国コーネル大学院 D. Ashworth 氏研究所見学
9. 17 文化庁附属機関長会議（国立教育会館）
10. 3 早稲田大学生アジ（インドネシア）氏ほか 4 名研究所見学
10. 7～ 8 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第 3 部会（京都会館）
11. 6 第51回関東甲信越地区国立大学会計部課長会議（下田）
12. 3～ 4 文部省所轄機関研究所長会議（国立遺伝学研究所）
12. 4 富山県高岡市伏木中学校教諭山本典子氏研究所見学
12. 8 大妻女子大学生田沢則子氏ほか13名研究所見学

- 12.13 埼玉県杉戸町立杉戸小学校長中居秀二氏ほか17名研究所見学
- 12.15 岐阜市北方中学校長大野小次郎氏ほか1名研究所見学
- 12.20 創立記念日 記念講演・講師 中島健蔵氏（研究所で）
1970. 1.13 第71回国立国語研究所評議員会
議事
1. 会長選出について
 2. 昭和44年度研究事業の中間報告について
 3. 昭和44年度地方研究員について
 4. 昭和45年度概算要求について
 5. その他
- 2.17 二松学舎大学生北 延芳氏ほか7名研究所見学
3. 6 大妻女子大学生川口ひなこ氏ほか3名研究所見学
- 3.14 長野県教育センター主事徳竹正道氏研究所見学
- 3.14 群馬県立渋川高等学校教諭岡田豊治氏ほか1名研究所見学
- 3.17 岩国市教育委員会指導主事本摩哲人氏研究所見学
- 3.19 第72回国立国語研究所評議員会
議事
1. 昭和44年度の研究事業について
 2. 内示された昭和45年度予算について
 3. その他
- 3.23 文化庁附属機関長会議（教育会館）

昭和45年9月

国立国語研究所

東京都北区稲付西山町
電話東京(900) 3111(代表)

UDC 058 495.6

NDC 810.5

本書の市販品発行所
東京都新宿区市ケ谷加賀町2の30 (260)5281
株式会社 秀英出版

国立国語研究所刊行書一覽

国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀英出版刊	290円
2	言 語 生 活 の 実 態 ——白河市および付近の農村における——	"	品切れ
3	現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞 ——用 法 と 実 例——	"	700円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 ——現代語の語彙調査——	"	500円
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——鶴岡における実態調査——	"	600円
6	少 年 と 新 聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	"	180円
7	入 門 期 の 言 語 能 力	"	200円
8	談 話 語 の 実 態	"	品切れ
9	読 みの 実 験 的 研 究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	"	"
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	"	"
11	敬 語 と 敬 語 意 識	"	"
12	総 合 雑 誌 の 用 語 (前編) ——現代語の語彙調査——	"	"
13	総 合 雑 誌 の 用 語 (後編) ——現代語の語彙調査——	"	"
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	"	400円
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	"	400円
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明治書院刊	品切れ
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀英出版刊	"
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) ——対話資料による研究——	"	800円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	"	80円
20	同 音 語 の 研 究	"	550円
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) ——総記および語彙表——	"	1,000円
22	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2) ——漢 字 表——	"	1,000円

23	話 し こ と ば の 文 型 (2) ——独話資料による研究——	"	550円
24	横 組 み の 字 形 に 関 す る 研 究	"	350円
25	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (3) ——分 析——	"	1,000円
26	小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達	明治図書刊	2,100円
27	共 通 語 化 の 過 程	秀英出版刊	750円
28	類 義 語 の 研 究	"	750円
29	戦 後 の 国 民 各 層 の 文 字 生 活	"	400円
30—1	日 本 言 語 地 図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30—2	日 本 言 語 地 図 (2)	"	"
30—3	日 本 言 語 地 図 (3)	"	8,000円
30—4	日 本 言 語 地 図 (4)	"	8,000円
31	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	"	250円
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	"	350円
34	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅱ)	"	450円
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	"	450円
36	中 学 生 の 漢 字 習 得 に 関 す る 研 究	"	(近刊)
37	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査	"	1,300円

国立国語研究所資料集

1	国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語 彙 調 査 ——現代新聞用語の一例——	"	品切れ
3	送 り 仮 名 法 資 料 集	"	"
4	明 治 以 降 国 語 関 係 刊 行 書 目	"	300円
5	沖 縄 語 辞 典	大蔵省印刷局刊	3,000円
6	分 類 語 彙 表	秀英出版刊	1,100円

国立国語研究所論集

1	こ と ば の 研 究	秀英出版刊	品切れ
---	-------------	-------	-----

2	こ	と	ば	の	研	究	第2集	〃	750円
3	こ	と	ば	の	研	究	第3集	〃	800円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭 和 24 年 度	品切れ	11	昭 和 34 年 度	220円
2	昭 和 25 年 度	〃	12	昭 和 35 年 度	350円
3	昭 和 26 年 度	160円	13	昭 和 36 年 度	160円
4	昭 和 27 年 度	160円	14	昭 和 37 年 度	220円
5	昭 和 28 年 度	240円	15	昭 和 38 年 度	250円
6	昭 和 29 年 度	200円	16	昭 和 39 年 度	250円
7	昭 和 30 年 度	200円	17	昭 和 40 年 度	250円
8	昭 和 31 年 度	220円	18	昭 和 41 年 度	300円
9	昭 和 32 年 度	200円	19	昭 和 42 年 度	300円
10	昭 和 33 年 度	220円	20	昭 和 43 年 度	350円

国 語 年 鑑 秀英出版刊

昭 和 29 年 版	450円	昭 和 38 年 版	950円
昭 和 30 年 版	600円	昭 和 39 年 版	980円
昭 和 31 年 版	450円	昭 和 40 年 版	1,100円
昭 和 32 年 版	480円	昭 和 41 年 版	1,100円
昭 和 33 年 版	480円	昭 和 42 年 版	1,100円
昭 和 34 年 版	品切れ	昭 和 43 年 版	1,200円
昭 和 35 年 版	550円	昭 和 44 年 版	1,500円
昭 和 36 年 版	800円	昭 和 45 年 版	1,500円
昭 和 37 年 版	品切れ		

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊	品切れ

1969—1970

ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1969 to March 1970

Study of Modern Japanese Grammar

Contrastive Study of Dialect Grammars

Cineradiographic Study of Articulatory Movements

Research on Meaning and Use of Verbs and Adjectives

Compiling and Publishing the Linguistic Atlas of Japan

Mastering of Chinese Characters by High School Pupils

National Survey on Pre-School Children's Language Power

Study on the Expressional Function and the Communication Effect
of Japanese

Study on the Language of the Meizi Period

Analytic Study of Language Data by Computer

Basic Study on the Relation between Language and Social
Structure

Study on the Writing System of Modern Japanese

Statistical Investigation of Newspaper Vocabulary

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
INATUKE-NISIYAMA, KITA, TOKYO